

# アーネスト・サトウ著 「上野地方の古墳群」の学史的位 置 英国外交官の考古学探究

Contributions of Ernest Satow's "Ancient Sepulchral Mounds in  
Kaudzuke" to the Development of Archeology in Japan

## 加部二生

はじめに

- ① アーネスト・サトウ著「上野地方の古墳群」
- ② 現地調査から執筆に至るまで
- ③ サトウが調査した古墳・遺物  
まとめ

### 【論文要旨】

幕末から明治期にかけて長く日本に滞在し、多くの日本研究の著書をもつ、英国人外交官アーネスト・サトウは、考古学に関する探究も行っている。その調査のために、サトウは実際に、1880年3月6日から10日までの間に、現在の群馬県前橋市にある大室古墳群を訪れている。その報告は、翌月の日本アジア協会の例会において早くも発表され、紀要としてまとめられている。本著は全編英文による論文で、その後、多くの研究者に引用されているものの、いままでに完全な翻訳は存在しなかった。

彼が訪れた大室古墳群は、その2年前に石室が開口して、多くの遺物を出土した。地元区長等が迅速に対応したために、遺物類の散逸を防ぎ、出土状況の詳細を後世に伝えることができた。サトウの調査は、これらに携わった人物から直接話を聞いて、現地を見学し、同行させた画家に、出土遺物のスケッチを詳細に行わせ、ガラス製小玉やベンガラサンプルを持ち帰って、科学的分析を行っている。また、被葬者の考察を行うに当たり、日本書紀等の文献史料を引用して、いわゆる「大化の薄葬令」から古墳の絶対年代の推定を試みている。当時としては、あまりに斬新過ぎる研究に、日本人研究者は驚きの色を隠せなかったようであり、且つ、多大なる影響を及ぼしている。さらに、古墳被葬者の住まいである居館跡について考察しており、結果的にはその位置については間違っていたものの、付近から近年、豪族居館跡である梅木遺跡が発見され、その想定が実証されている。現代の考古学研究者に最も教訓となることは、文献史料を援用しても、あくまで実年代論については、考古学的成果に委ねるべきと警鐘している。

大室古墳群は近年、史跡整備のために事前調査されて、墳丘規模と墳丘構造の間に相関関係が認められることが明らかになった。こうした何らかの制限が古墳を築造する際に下され、首長層のみに前方後円墳が構築されていったものと推定される。

## はじめに

幕末から明治期にわたって長く日本に滞在し、外交官としても活躍した英国人、アーネスト・メイスン・サトウ (Sir Ernest Mason Satow)<sup>(1)</sup> が行った一連の日本研究については、近年にわかに脚光を浴びてきている。<sup>(2)</sup>

サトウは1843年6月30日にロンドンで生まれ、ユニバーシティカレッジを卒業後、1861年に通訳生としてイギリス外務省に入っている。1862年に初来日して以後、江戸幕府の倒幕から、維新政府の誕生という転換期を目の当たりにしている。その間に日本語書記官へと昇進し、1869年に一時帰国。1870年に再び来日して、以後1883年に帰国するまでの13年間に、横浜に活動拠点をもつ、日本アジア協会 (The Asiatic Society of Japan) を中心として多くの著作を発表している。イギリスに再帰国後は、シャム総領事、同国公使等を経て、1895年から1900年までの約5年間は、駐日公使として日本に滞在し、日英同盟締結の蔭の立役者とも言われている。こうした功績から Sir の称号を与えられ、枢密顧問官、ハーグ国際裁判所英国代表評定員等を歴任。1929年8月26日に86歳で没している。

彼の著作は多方面に及んでおり、特に1861年から1927年まで書き綴られた、「サトウ日記」は部分翻訳されて、多くの書籍として刊行されている。歴史関係の論文としては、蝦夷や琉球、八丈島、朝鮮といった特定地域の研究と、伊勢神宮を中心とした神道や神話、仏教、古来の祭式等に関する論考に代表される。こうした中で唯一、考古学関連の著作として評価されるのが1880年、二等書記官当時に発表された「上野地方の古墳群」、原題は、「Ancient Sepulchral Mounds in Kaudzuke」である。本論は、『Transaction of the Asiatic Society of Japan』vol. 8 part 3に掲載されている全編英文による論文で、その存在は多くの研究者によって文献を引用されているものの、いままでに完全な翻訳はなされていなかった。<sup>(3)</sup> この中の冒頭でサトウは自ら述べているように、当時まだ黎明期であった日本考古学界は、モースをはじめとした外国人研究者が趨勢をしめており、こうした仲間にもサトウも加わりたかったものと思われる。本論を執筆するためにサトウは実際に、1880年3月6日から10日まで上野地方 (群馬県) への旅行にでかけている。<sup>(4)</sup> 画家を同行させて遺物をスケッチさせるなど史料的价值は高く、その後の日本人研究者へも多大な影響を及ぼしている。<sup>(5)</sup>

### ①……………アーネスト・サトウ著「上野地方の古墳群」

(訳文中の〈 〉内文章は訳者が添付したもの。原文の註は本文中に(註1)とし、今回訳者が新たに追加した註は行間に(1)として記している)

1880年4月13日講演する。<sup>(6)</sup>

この国の考古学研究にとって、画期的な報告が近年次々に発表されている。それは、エドワード・モース教授の大森貝塚の発見(註1)とそれ以後に、全国各地で次々と発見された貝塚や、ボン・シーボルト氏の『日本考古学ノート』の発行である。<sup>(7)</sup> このノートには興味ある事実や、様々なイラ

ストが盛り沢山掲載されている。最近では、ジョン・ミルン氏による蝦夷の研究調査がある。この研究は既に本協会誌に同氏によって発表されている(註2)。これらの課題は従来の研究に新しい指針を与えたもので、次々発表される断片的な史料を蓄積することにより、この国の歴史が見えてくるといえよう。本稿でとりあげる、約2年前に発掘された上野地方の古墳や、付近の出土遺物について報告することも、こうした確信に基づいている。

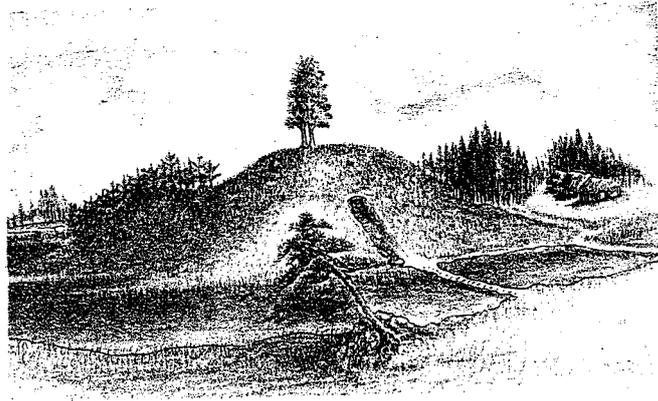
大和地方を旅行する人は、誰でも特徴ある土饅頭形の古墳を目にする事ができる。それらは、あるものは周囲に堀が巡らされ、中には古代の首長の遺体が横たわっている。上野地方にも、多くの古墳がある。大室村の付近を1時間程散策した時に、6基の確実な古墳と、おそらく古墳と思われる塚を6ヶ所確認した。これらのうち、3基は既に発掘されており、いずれも遺体は出なかつたらしい。しかし、発掘されたのが相当昔のため、記録が失われていて詳細は不明なようである。この地方では円墳は中層階級の人々の墓であったようである。そして、土器や他の副葬品は、別の形の古墳(=前方後円墳)から多く出土する。これら(前方後円墳)は、大屋村と大室村にあり(註3)、前者に2基、後者には3基ある。大屋村所在のうち1基は、60年位前に発掘され、その取り壊しに関係した最後の1人が3年前に死んだ。その古墳は鈴鏡と、勾玉と、珍しい土器片が出土した。土器片については、後で紹介する。2番目は1878年に発掘された。大室村では3基のうち2基が発掘されており、鉄製武器類、青銅製品、青色ガラス玉、特異な形態の土器等の多数の遺物が出土している。

前方後円墳の墳丘形状は、(横方向から見た)スケッチを添えることによって一目瞭然である(第1図参照)。言うなれば二重の山であり、地元では二子山または双子山と呼んでいる。古墳の主軸はほぼ東西方向へ走っており、西の端は方形で、東側は円形である。後円部には遺体が南北に横たわっている石槨があり、前方部はそこに供物を供献することにより、死者を弔った場所であったと想像される。墳丘は中央部が僅かに括れており、リッジ(背)の窪地がそれに一致している。外観は長年の風雨や、植物によって相当削られていると思われ、築造当初は三段に構築されていたと推定される。各段の上には、約2フィートの高さの1列の円筒埴輪で作られた柵があった。その埴輪の下半部にある穴(透かし孔)を通して、木の棒や竹でつながっていたと考えられる。

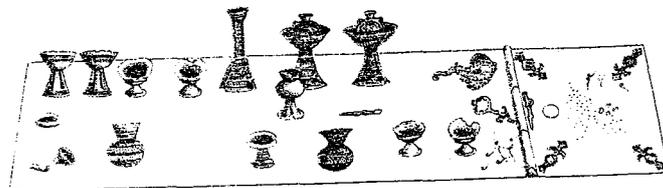
これら3基の古墳のうち、南(前二子)と北(後二子)にあるものは一重周溝で囲まれている。しかし、中の古墳(中二子)は二重周溝である。その堀の跡は今でも明瞭に観察される。数基の小円墳が周辺に不規則に点在しているが、未調査のため陪塚とは断定できない。おそらく、二重周溝を持つ古墳は、これらの中で最も身分の高い人物の墓と推定される。これらの古墳が発掘されれば、更に多くの発見が期待されよう。

便宜上、最南端の古墳(前二子)から説明する。公式な測量によると、その墳丘の高さは36フィート、長さ372フィート、幅284フィートある。主体部は東側の後円部にあり、入口は南側で少し東に傾いて開口している。石室は3区画に別れており、最も外側は長さ33フィートの通路(羨道)で、24フィートの長さの礼拝室(玄室)に続いている。それからさらに奥に幅6フィートの室(棺座)が造られている。そこには棺が安置されていたと推定される。玄室の高さはいずれも6フィート以上あり、幅は入口部で約3フィートで、中に行くほど幅が広がり、最奥部では約4.5フィートある。壁や屋根の石材は、未加工の自然石で構築されているため、正確な計測は難しい。石

材は、付近の山腹の石切場から運ばれたものと推定される。これらの石の大きさは、相当巨大なものである。羨道部の天井石は少なくとも長さ5フィートで8つの石があり、幅は平均して4フィート以上に及んでいる。石室閉塞部分は不規則な石や土で充填されており、その奥の両端に、内側への入口を閉じている2つの大きな平たい石〈玄門〉がある。玄室は低い敷石〈襖石〉によって分割されている。古墳が最初開かれた時、その墓の内部は、細かな土砂が約半分まで埋没していた。その土砂は、天井石の隙間から何世紀もの期間を経て堆積したものである。これを取り除いているときに、玄室前面部分〈第2図参照〉で17個の土器、青銅製馬具破片、青銅製鏡破片、鉄製槍〈鉾〉



〈第1図〉



〈第2図〉

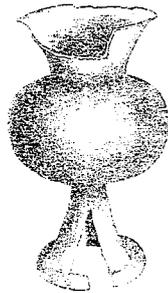


FIG. 1



FIG. 2

の身、多量の鉄鏃と若干の鉄鎖〈兵庫鎖〉が発見された。玄室最奥部の棺座内からは、約300の青いガラス製小玉、金環（FIG. 29参照）〈FIG. 25～28の誤りか？〉、直径4.75インチの青銅製鏡1、鉄製槍〈鏃〉1、数点の鉄製留金と僅かの鎖が発見された。そして四隅にかなり破損した4つの青銅製飾り〈剣菱形杏葉〉<sup>(9)</sup>が発見された。アトキンソン氏の分析によれば、数点のガラス製小玉の破片はカリと石灰の珪酸塩でできており、鉄の珪酸塩が含まれ、コバルトの酸化物で着色されている。ガラスは鉛を含んでおらず、比重は2.38と小さい。鉄製品は殆ど錆びており、青銅製品も錆が著しいものの、鏡はほとんど無傷で発見された。床は多量の朱で覆われており、そのサンプルを持ち帰った。リンを含んだ酸と、石灰を極少量含んだ鉄の赤色酸化物で構成されることがアトキンソン氏の分析によって後にわかった。

これらの玉で構成された首飾りと輪〈金環〉、鏡と共に、遺体は（日本人にはベンガラとして知られている）鉄の赤い酸化物で満たされた木棺の中に入れられていた。その棺は、鉄の留金や鎖の破片が床の上から発見されていることから、天井から鎖でつるされていたと考えられる。四隅から発見された青銅製の鏃槍形をした飾り〈剣菱形杏葉〉は、おそらく棺の端についており、四隅に真っすぐに置かれていたと思われる。時の経過とともに、肉体と埋葬者の衣類と木棺は腐り、一方、不滅の中身のみが床に落ちた。留金と鎖もすっかり腐蝕し、若干は棺座の外にも落ち、残りの中には落ちたものと推測される。これらはいずれも、土砂が天井の隙間から堆積する以前に起きたと考えられる。もし、日本紀〈以後、日本書紀と記す〉に記されているように、棺を槨で作る習慣とすると、槨は日本に自生するもっとも長持ちのする種類の木なので、崩れ落ちる前に20～30年はもち続いたと推定される。墓の内部で発見された陶磁器は主に2種類あり、1つは黒灰色で厚く非常に堅い〈須恵器〉。もう1つはピンク気味の赤色で薄く比較的柔らかい〈土師器〉。3番目のものはテラコッタであり〈以後、埴輪と記す〉、2番目と同じ性質の幾分か粗い粘土でできており、既に記した円筒埴輪列に使われていた。これらの装飾は主に7種類あり、第1は、水平な細い溝を挟んだ平行線模様〈以後、沈線文と記す〉。第2は、角ばった波線又は、ペーストの上に2～7本の歯を持つ櫛を用いて表現するジグザグ模様〈以後、波状文と記す〉。第3は、軸から傾いたある方向にナイフで細かいV字形の切り目を刻み、それからV字形に左側に一列の点を刻むことによって作られた模様。第4は、先の尖っていないもので描かれた平行線によって作りあげられた不規則な凶案〈以後、平行タタキと記す〉。その平行線はほんの僅か食い違っている他の線と右の角で交差している。その結果、一種の目の粗い布の表現に類似している。第5は、何か特別の意味なく描かれた曲線模様で、それは不規則なやり方でお互いに交わっている。第6は、同心円に刻まれた模様〈以後、青海波状文タタキあて具痕と記す〉、第7は、小さなボタンか粘土の突起である。そのほか、土器を貫通して開けられている四角形、三角形、円形の透かし孔がある。埴輪の破片は、表面を縦方向の平行線で覆われており、それはブラシのような工具で施文されている〈以後、ハケメ調整と記す〉。

最初の古墳〈前二子古墳〉の出土品について、詳細に記述してみたい<sup>(註4)</sup>。

#### No. 1

上葉がかかっていない、回転ろくろで作られた普通の赤い粘土のもの。その脚部にあく一對の三角形透かし孔は、粘土が柔らかい時にナイフで切り取ったものである。片側の一部は、油煙のため

---

明瞭に黒ずんでいる。

器 高	11.94 インチ (註5)
口 径	6.18 インチ
頸部径	4.05 インチ
球胴部径	7.73 インチ
脚部上面径	2.91 インチ
脚部底面径	6.36 インチ

No. 2

青白色気味の赤褐色粘土で作られている。割れ口は黒色を呈す。ボール〈以後、坏部と記す〉の内面にはロクロの痕跡を明瞭に残す。外面の口縁部下に7本の波状文が施され、2条の沈線で区画された下位にはさらに別の波状文がある。その下位には、平行タタキが施される。波状文は基部の4つの各段にも施文されている。

器 高	15.60 インチ
坏部径	10.71 インチ
器台上部径	4.28 インチ
器台底面径	10.82 インチ

No. 3

黒褐色を呈する偏平な丸い瓶。前の側には同心円状の彫り〈以後、カキメ調整と記す〉があり、後ろは全く平ら。2つの耳に通した紐で壁にかかっていたと思われる。しかし、No. 2の坏部の中に真っすぐに載って発見されている。

胴部径	10.11 インチ
厚 さ	5.71 インチ
口 径	2.73 インチ
頸部高	1.43 インチ

No. 4

これはNo. 2に非常に類似している。ただ一つの違いは基部の区分が一段少ないことである。坏部内面の底部は、青海波状文タタキあて具痕で覆われている。坏部の口唇部は二条の波状文によって裝飾される。坏部の外側には鋭角に交差する2方向の平行タタキが施される。色、材質ともにNo. 2と同じである。

器 高	14.99 インチ
器台高さ	10.11 インチ
坏部径	14.28 インチ
脚部径	12.14 インチ
基部上面径	4.46 インチ

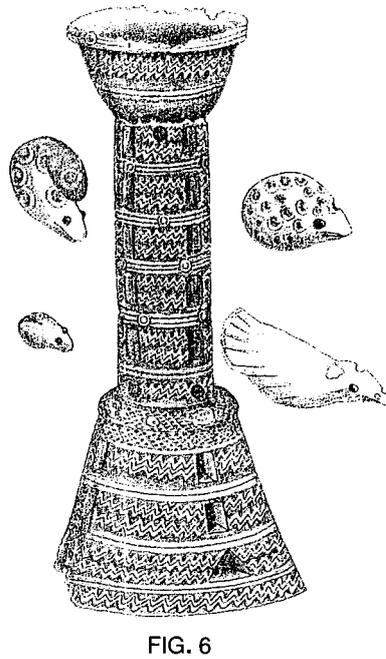
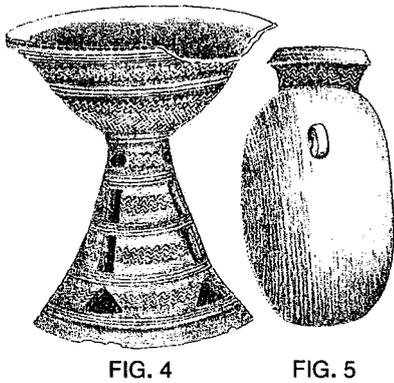
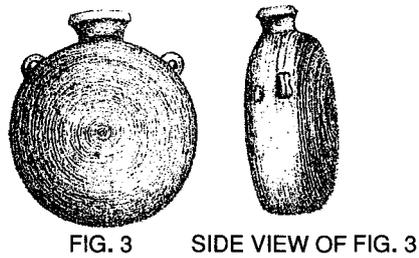
No. 5

No. 3に類似する偏平な丸い瓶。幅の広い首があり、わずか一方に傾いている。そして口唇部の下に波状文が施される。これはNo. 4の中に置いてあった。

---

No. 6

底部に直径1.5インチの穴があき、小さな坏部を上のにせている丈の高い円柱形土器。何のために穴が付されているのか憶測することができる。それはおそらく、神に対して作られた捧げ物にしばしば表現される、荒妙〈あらたえ〉と和妙〈にぎたえ〉を表した、布の吹き流しを付けた棒を立てていたのであろう。色は全体的に黒褐色を呈しており、基部は鉄の赤い酸化物で色付けされていた。坏部はロクロの痕跡が明瞭である。装飾は、坏部の外側と円柱や基部の各部分に波状文を施している。円柱部は横方向の沈線により6区画され、小さなボタン状装飾が添付されている。基部の上部の縁は、ナイフや先のとがっていない点で作られた模様〈以後、烈点状刺突文と記す〉があり、更に鳥、魚、かえる、ねずみを表現していると思われる小さな4つの画像で飾られている。さらに



もう一つの画像が付着していたスペースがある。しかし、それは欠損している。円柱上面の5つの区画はそれぞれ2列の波状文が施され、最下段の区画は1段の波状文しかない。ベルの形をした基部は、一番上が1列の波状文、2段目と3段目の区画は2列、1番下は1列の波状文が施文される。すべて5本歯の櫛で施文されている。

坏部高	2.86インチ
円柱部高さ	12.02インチ
基部高さ	8.69インチ
合計の高さ(器高)	23.57インチ
坏部径	7.73インチ
円柱上面径	4.28インチ
円柱底面径	3.45インチ
基部上面径	5.06インチ
基部底面径	11.66インチ

No. 7

黒灰色の粘土で作られた幅広の口を持った花瓶。鉄の赤い酸化物で着色された痕跡がある。頸部の装飾は、5本歯の櫛で施文された3つの近接した波状文。球胴部分には、烈点状刺突文による2条の模様帯がある。

器高	.28インチ
口径	.47インチ
球胴部径	7.50インチ
頸部径	3.57インチ
球胴部高さ	5.36インチ

No. 8

茶色の高台付大皿。彩色はない。曲線から成る側面で形づくられた基部に、2つ〈1対〉の三角形の孔〈透かし〉があり、坏部上面の波状文は3本歯の櫛で施文される。

器高	5.12インチ
脚部高さ	3.21インチ
坏部径	3.98インチ
脚部径	3.39インチ
頸部径	1.43インチ

これらの容器は3個発見され、そのうち1個体は2つに割れていた。

No. 9

茶色粘土の花瓶。底部が丸いため、簡単には真っすぐ立たない。頸部全体が波状文で覆われている。そして球胴部の中央に烈点状刺突文の模様帯が施文されている。この帯の中には、慎重に形づくされた丸い穴があるが、取り付けた口の痕跡は見あたらない。

器高	5.38インチ
球胴部高さ	2.80インチ

口 径 5.71 インチ  
球胴部径 4.40 インチ  
頸部径 2.80 インチ

No. 10

褐色の高台付大皿で、No. 8 に類似する。脚部に頭を切断された三角形の透かし孔がある。

器 高 5.95 インチ  
口 径 5.83 インチ

No. 11

赤い粘土の高台付大皿。装飾はない。



FIG. 9

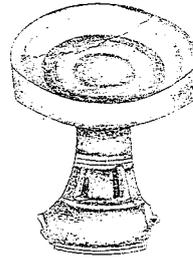


FIG. 10



FIG. 11



FIG. 12



FIG. 13

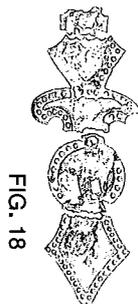


FIG. 18

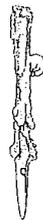


FIG. 17



FIG. 16

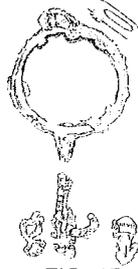


FIG. 15

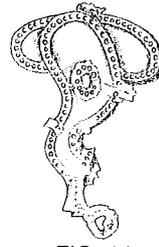


FIG. 14

---

器 高 5.35インチ  
口 径 7.38インチ  
脚部径 24インチ

1対発見された。

No. 12

No. 11に類似した、寸法の小さい高台付き大皿。

器 高 5.12インチ  
口 径 6.48インチ  
脚部径 5.24インチ

1対発見された。

No. 13

赤い粘土の台皿。側面〈口縁部〉は垂直に立ち上がり、装飾なし。

口 径 4.64インチ  
器 高 1.78インチ

No. 14

馬具青銅製鏡板。長さ13インチの水平〈横〉の薄い板金と高さ8 $\frac{3}{4}$ インチの垂直な薄い板金できている。小さな丸い突起で装飾された二重の縁金がついている。

No. 15

直径6インチの鉄製輪鍔と、鍔を10インチの長さで吊っていた真っ直ぐな金具。錆が著しく4片にわかれている。

No. 16・17

2つの鉄製槍〈鉞〉の身。各長さは約1フィートで錆が著しい。

No. 18

青銅の薄い板金の鉞槍形をした装飾〈剣菱形杏葉〉。約17インチの長さで、小さい突起で飾られている。二重の縁取りがあり、4点ある。すべて多少の腐蝕はあり、こわれた状態である。

No. 19

赤い粘土の人物頭部破片〈人物埴輪頭部破片〉。古墳基壇面の土中に埋まって発見された。

No. 20

古墳の基部で掘り出した円筒埴輪。竹や木の棒が通っていた透かし孔より上部は欠落している。表面は目の粗い縦方向のハケメ調整で覆われている。

透かし孔の縁までの高さ 11.54インチ

直 径 6～6.55インチ

No. 21

No. 20と同じような角に位置する埴輪。〈朝顔形埴輪〉。それは突帯部分で終わっている。粗野な粘土製で、ハケメ調整はなく、手作り。本品はどの古墳から出土したのか確認できない。

器 高 14.28インチ  
口 径 4.64～6インチ

---

埴輪の破片は、この付近の古墳を発掘すれば常に出土するという。発掘することによって、誰でも簡単にたくさんの埴輪を手に入れることができる。

中央の古墳〈中二子古墳〉はすでに述べたように、まだ開口していない。北側の古墳〈後二子古墳〉は開口したとき、石室は1室からなり、規模は入口部で深さ21フィート、幅5フィート、奥では幅9フィートに増え、高さは6フィートを少し越えていた。前述したとおり、〈前二子古墳と〉同規模の大きな自然石で構築されている。天井石は5つの自然石で構成される。最大の石は、7×

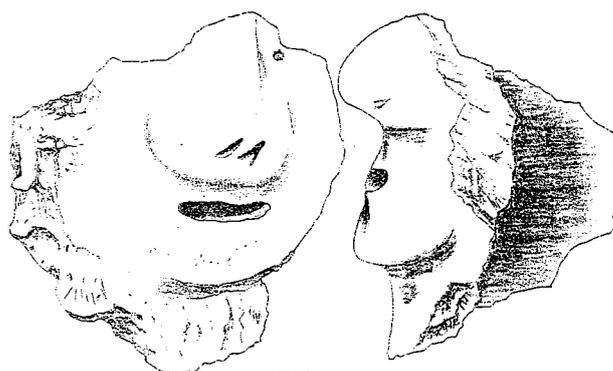
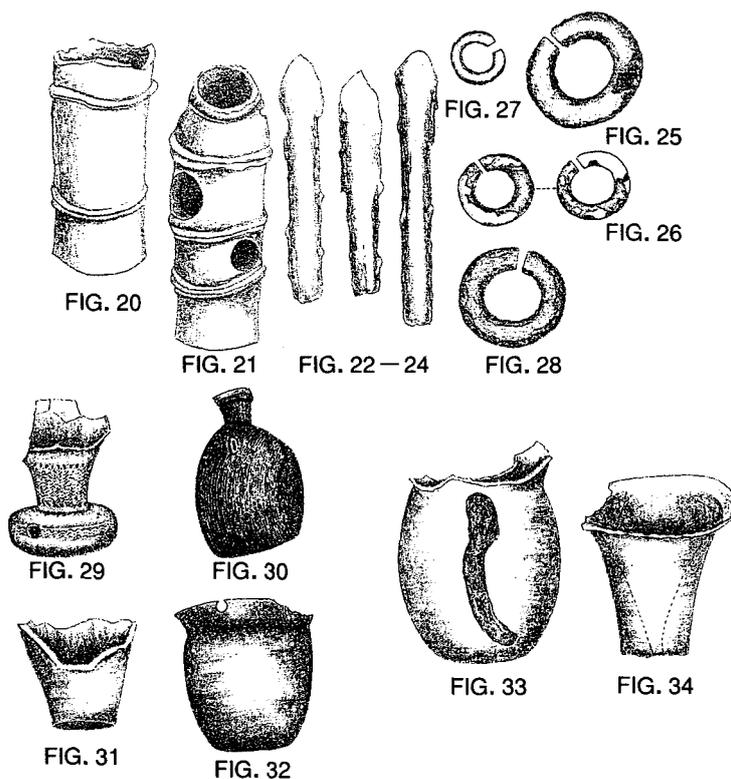


FIG. 19



5フィート、厚さ平均2フィートある。入口は〈墳丘〉南側の南西〈南東の誤りか?〉にある。この墓〈石室〉の中から数人分の人骨、歯、多数の鉄鏃（FIG. 22-24参照）、大小の指輪〈耳環の誤り〉等が出土した。指輪は数点が鉄製、あとの数点は鍍銀した青銅製であった。出土遺物中、珍しい土器片がある。それは内面に青海波状文タタキあて具痕があり、一般的には、古代朝鮮の陶磁器の特性を示していると考えられている。外面はNo. 2とNo. 4で図示した遺物と同様な、不定方向の平行タタキによって施文されている。この破片が出土した正確な場所はわからない。しかし、それは村のどこの畑を掘っても見つけれないと〈地元民に〉教えられた。拭いた後の両面の絵をFIG. 38に示した。木花之開耶媛を祀っている産泰神社の後方で、大屋村に近接した村の付近に5基の円墳を持つ第4の二子山古墳〈伊勢山古墳〉がある。石室は開口していて、1室からなり、幅は約6フィート、高さ7フィート、奥行き16フィートである。天井石は大きな3石で作られ、その各々は約10フィート×4フィートを測ることができる。そこから土器は発見されなかったが、数振の刀身と多数の鉄鏃に、10個の指輪〈耳環〉が出土した。指輪の数点は青銅で覆われた鉄製（FIG. 25参照）。数点は鍍金された青銅製（FIG. 26参照）。数点は貴金属をかぶせた痕跡がない青銅製（FIG. 27参照）で、これらのうち数点は銀で被覆されていた。

また、産泰神社の南側には、60年程前に発掘された双子山古墳の遺跡〈大黒塚古墳〉がある。発掘時にはかなり多量の遺物が出土した。それらのうち数点は、現在当神社の神主、コイトマミチ<sup>(11)</sup>が所有している。墓〈石室〉の石は建築材料に用いるために、数人の石屋に運び去られた。次に残された出土遺物の主なリストを示す。No. 29は黒粘土製の小さな花瓶〈須恵器壺〉で、幾分かNo. 9に類似する。頸部のほぼ全面を波状文で覆い、球胴部の中央を取り巻いている模様帯に円孔が穿たれている。この花瓶は底部がきちんと立つように作られている。

器高	5.00インチ
球胴部高	2.08インチ
口径	5.24インチ
球胴部径	4.05インチ
頸部径	1.84インチ

#### No. 30

黒粘土製壺〈須恵器壺〉。No. 3とNo. 5に類似するが、器表全体、即ち側面にまでカキメ調整が施される点が異なる。偏平な裏側の直径は7.14インチで、側面の厚さは6.9インチ、口径は3.8インチを測る。この器がどういう機能をしたか推測することは難しい。壁に耳でつるしたか、あるいは地面に平に置いたのかもしれない。突出する口縁部は前面に近い位置なので、この状態でもかなり多量の液体を入れることができる。しかし、いずれにしても後ろの装飾は全く無用である。多分これは、第1の古墳〈前二子古墳〉の出土状況のように、器台の上に置かれるのであろう。（FIG. 2と4参照）

石室外の遺物を除いて、本墳からは次のような出土遺物があった。

#### No. 31

壺の破片。急に細くなる形状から、これはたぶん地面に打ち立てて使用されたと思われる。

#### No. 32

## 赤い粘土の壺。〈土師器甑〉

多くのかき傷があり、明らかに手持ちでナイフを使って形作り、器壁は薄く削られた。割れ口から材質は黒粘土であることを示している。そして赤い色は、持ち主が風雨に長くさらしたためであろう。それはある期間花瓶として使われた。そして穴はその目的に適合させるため、底部に開けられている。〈植木鉢のように用いたと推定したためか?〉

器 高 5.00 インチ  
口 径 5.95 インチ

## No.33

内外面共に明褐色の大きな壺で、黒い斑点があるのは炉内で火にあてたためであろう。頸部はほとんど破損しており、その部分の明確な形を推定することはできない。

器 高 11.90 インチ  
頸部内径 6.07 インチ

## No. 34

青白っぽい赤褐色陶磁器の花瓶。底部付近は破損しており、〈高坏の底部を逆に見ているため〉口の広い平らな口唇部をもつ。破線部分は、内部がいかにか細くなって先が尖るかを示している。それはおそらく、FIG. 27に表された破片のような脚があったと思われる。

しかし、この数少ない収集品の中で最も興味深い破片は、人間を形どった胸像である〈人物埴輪〉。それは同じ古墳の外〈墳丘〉で掘り出された。そして一時期、その寺〈神社〉への参詣者のなぐさめのために道端に立てられていた。それに石を投げておもしろがっていた村のいたずらっ子たちの行為に悩み、現在の所有者の祖父が子供たちの手からそれを救い、大切に保管した。最初発見された時それは、手をひざの上に置いていて、ひざまで完成した座っている姿で、腕には長い細い袖を身につけていたそうである。しかし、FIG. 35からもわかるように、現在は頭部のみで、衣服については何もわからない。破片の高さは14インチ。その材質は非常に堅い黒粘土で作られているが、像が乾燥されている間に帽子のへりに幾分か布地の織目が付き、手作りを示している。この胸像の奇妙な目つきをした人相についての評論はさげたい。というのはこの像自身がそのことを十分に物語っているからである。FIG. 36は横方向の図を示している。非常に奇妙な土器の破片はFIG. 37に示してある。それはよごれた黒粘土製で、すでに記述した烈点状刺突文で施文されている。その破片の表面には斑点が加えられていて、他の模様が完成したあとで作られた、規則的に形づくられた曲がった隆線も加えられていた。この破片は小破片であるため、本来どのような原型をしていて、どの部分にあたるのか全く見当がつかないものである。これは畑の中から掘り出されたいが、その明確な出土位置は定かでない。

勾玉は、1878年に発掘された3基の古墳のどれからも発見されなかった。しかし、コイトは表面が磨かれていない白っぽいメノウ製勾玉を1つ所有している。それは彼が言うには、土器を出土した古墳〈大黒塚古墳〉から発見されたい。

これらの古墳と同じような塚は、前橋街道の伊勢崎と、境町の間位置するカミダクシ(註6)〈以後、上武士と記す〉の村にもある。そして60~70年前にそこから出土した遺物類を、現在スズキキョウタイ<sup>(13)</sup>という名の医者が所有している。彼は上武士の近くのホズミ〈保泉〉に住んでいる。



FIG. 35

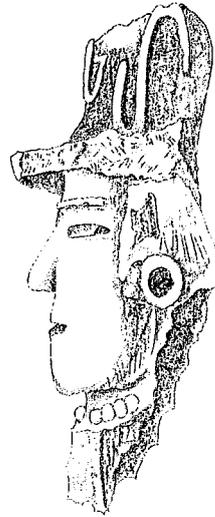


FIG. 36

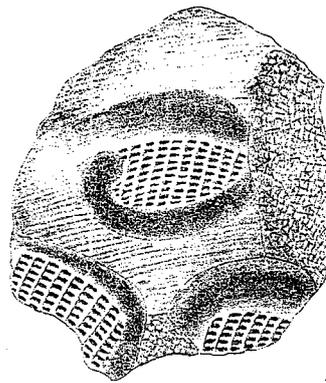


FIG. 37

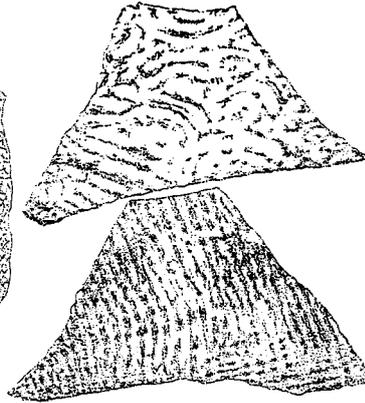


FIG. 38

これら埴輪破片のうち、第1の人間像（FIG. 39参照）は、高さ18インチで、腕と手が完全に残っており、丸い冠のような細い縁の帽子をかぶっている。鼻は欠損しており、そのために顔から固有の表情を奪っている。その製品は既に記述した円筒埴輪類と全く同じで、同じ縦方向のハケメ調整がある。

第2に馬形埴輪頭部（FIG. 40参照）は、縦方向のハケメ調整と頭についている形づくられた面繋があり、突起とこぶで飾られていた。これらのこぶは小さな空洞の青銅の球を表している。中に小さな凹凸の球が入っており、鈴の一種である。目の1つは破損しており、鬘と前髪も欠落し、耳の1つも短く折れていた。顔の表面の長さは約17インチ。背中の様子から、完全な姿には首があ

ったと思われる。これら2つの像以外にハケメ調整の施された円筒埴輪がある。本品の頂部は破損しており、高さ19.16インチ、直径5.7インチ、頂部付近に横棒が入るための透かし孔がある (FIG. 41参照)。私はこれらの物を見せてくれた人の話から、上武士村にはまだ未発掘の古墳が相当あると確信した。しかし、私にはその場所を尋ねている時間がなかった。

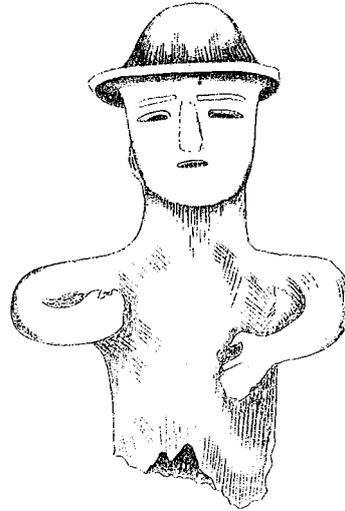


FIG. 39

こうした古墳の出土遺物中に、被葬者の名前を推定できるような文字資料は確認されていない。しかし、地元の伝説は彼らの身元を明らかにする手掛かりを与えている。姓氏録(註7)に非常に早い時期に、帝の分家はその扶地として日本の東国地方を受けたとされる文献史料がある。そしてこの家系は後に、上野君と下野君(註8)と呼ばれる二家に別れたらしい。この二家からはさらにたくさん他の家系がおこった。両氏の始祖は、後に帝になり、歴史では垂仁天皇として知られているイクメ入彦(活目尊(いくめのみこと))の

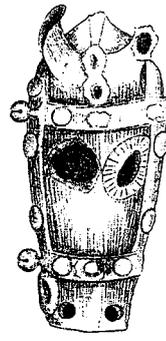
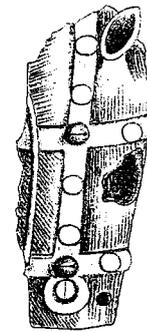


FIG. 40



SIDE VIEW



FIG. 41

兄の豊城入彦である。日本書紀に語られている伝説によると、彼らの父親(崇神天皇)は同じくらい2人を慈愛していたので、2人のどちらを自分の後継者にするか決めかねていた。そこで帝は各々の夢を語らせ、2人が見た夢を占うことで自分の後継者を決めることにした。2人の皇子は、帝の命令を受けると禊をし、祈りを捧げて、各々夢を見るために眠った。夜が明けて兄は帝に次のように自分の夢を語った。彼は夢の中で、ある丘(三輪山)に登り、東に向かって槍を8回突き出し、剣を8回振り下ろした。次に弟も夢の内容を帝に語った。彼も同じ丘に登り、自分の四方に縄を張って、穀物をむさぼり食っている雀を狩った。2人の夢の内容から帝は、兄は(武器を用いたので)君主には相応しくなく、東に向かって東国を統治し、全帝国の君主には弟が相応しいと決断した。それ故、後になって弟が正式に王位の後継者として認められ、兄は東国地方の支配者に任命された。これらの出来事は崇神天皇の48年に起こり、これは西暦ではB. C. 50年と一致する。しかし、この日付はトロイ陥落がB. C. 1184年であるのと同じように、確信を持って受け入れられるも

のではない。豊城入彦の息子は八綱田で、その息子の彦狭島皇子によって東国地方の支配者の地位を確立させた。しかし彦狭島皇子は任に赴くため都を出発して途中で死んだ。東国人（おそらく幾人かは彼に会うため大和にのぼっていた）が極秘に彼の遺体を運び去り、それを上野地方に埋めた。日本書紀は（これらの記録は日本書紀から取った）更に次のように続けている。彦狭島の息子の御室別皇子は、彼の父の地位を受け継ぐように次の年に指名された。この事件は、伝説上の年表に従えば景行天皇56年、西暦ではA. D. 126年である。そして、慈悲深く賢明な統治者であるこの皇子の子孫達は今日まで、（即ち8世紀のある時期まで）この地方に存命しているとそれにはつけ加えられている。もし御室別皇子が埋葬された場所と、中二子古墳が同一のものであるという地方伝説が確かであるとするならば、土器が多量に出土した古墳〈前二子古墳〉がおそらく豊城入彦の墓であろうという日本の考古学者の推測は容認の価値があると言えよう。前橋西方の植野村に、豊城入彦の墓だと言われている古墳が公式に<sup>(14)</sup>あった。<sup>(15)</sup>そして観古図説の第1巻で蛭川氏は、18世紀の終わり頃にそこから出土した美しい形の壺を図示した。この壺の飾りは、大室で掘り出された土器の壺に非常に類似しているのだから、同民族の人々によって、同時代頃に2つの古墳が作られたと結論づけることは可能である。彦狭島の遺体は、東国の住人によって運び去られたというが、埋葬された場所はまだ発見されていない。群馬県のこの地域は多数の古墳があり、町の敷地の相当の部分占めている。そして大室村の北方の見晴らしのよい場所に一辺の土地がある。ここに、この地方の有力者が防塁を築いた住宅があったと推定される。それは南、西、東側が野原で、その上に建てられており、かつては堀が完全に巡っていた。現在、稲田に変わっている堀の部分も、外の土手は完全に残っており、今でも一目瞭然である。これらの古墳の埋葬者が実際に、今まで述べてきた古代の英雄達の墓であるという見解を採用するとしても、私は日本〈記紀〉の年代の正しさを支持することはできない。こうした古墳の正しい年代観は、考古学者によって決定されねばなるまい。というのは、彼らは古墳から出土した土器の年代観に関して、十分な基礎づけられた意見を述べるができるからである。族長の墓に、人間や馬を埋める古代日本の習慣については、しばしば言及された。そして人間や馬を埋める代わりに、既に記してきた埴輪像に後世変わった。最も重要な一節は、日本書紀巻6垂仁天皇の年代記の中にある。それを私は、できるだけ詳細に翻訳する価値があると考えている。〈垂仁28年〉10月丙寅の朔庚午の日<sup>(註9)</sup>、帝の異父弟倭彦皇子〈やまとひこのみこと〉が死んだ。11月丙申の朔丁酉の日<sup>(註10)</sup>、彼らは身狭〈ムサ〉の桃花鳥坂<sup>(註11)</sup>に倭彦皇子を埋葬した。この時、皇子に直接仕えた人々を集め、皇子の墓のまわりに彼らを全員生き埋めにした。何日間も彼らは死なず、日夜さめざめと泣いたり、泣き叫んだりした。ついに彼らは死んで腐った。犬や鳥が集まって来て亡骸を食べた。帝は、彼らの泣声を聴聞され、心中嘆き悲しんだ。そして、臣下の者に詔して言った。「人が生きている間に愛した人々を、殉死させることは嘆かわしい。それは古からの習慣ではあるが、悪し習慣は継承する必要はない。今から以後、殉死をやめさせたい。」

「32年の秋、乙卯の朔<sup>(註12)</sup>、甲戌の日、日葉酢媛の命が（他説にはヒバスネノ命と呼ばれていた）死んだ。そして彼らは、彼女の埋葬のために数日を費やした<sup>(註13)</sup>。帝は臣下の者に詔して言った。「我々は死人に従う習わしはよくないと以前知った。このたびの埋葬ではいかがすべきか。」すると野見<sup>(註14)</sup>宿称が前に出て言った。「媛の墓に殉死を行うのはよくない。それ故この習わしを後世に伝えることはできない。」それから自分の意見を提案する許しを請うてから、出雲国に使者を派遣

して、100人の陶工集団を上京させた。彼は自ら陶工を指揮して粘土を取らせ、人や馬や色々な者の形を作らせた。そしてそれを帝に献上して言った。『今から以後、粘土の物を生きている人間の代わりにして墓に立てることを、後世のために法令とすることを上申する。』そこで帝は大いに喜んで野見宿称に命じて言った。『汝の名案は本当に朕の心を喜ばせた。』そして粘土の物を日葉酢媛の墓に始めて立てた。それ故、これらの物は埴輪と呼ばれた。<sup>(註15)</sup>それから帝は詔して言った。『今から以後、墓には必ず埴輪を立てて、人を傷つけてはならない。』帝は野見宿称を惜しみ無く誉め、彼に粘土をこねる場を与え、陶工集団の長に任命した。』

781年にその集団の15人が、彼らの先祖である、野見宿称の偉大な貢献を思い出させる言上を行っている。その中で彼らは言っている。「垂仁天皇の御世には、古代の風習は旧態依然であった。そして葬儀の形は規定されていなかった。凶事があるたびに殉死者を多く埋葬することが一般的な習慣であった。皇后が死んで宮廷の庭に死体小屋〈殯宮〉がまだあった時に、帝は臣下の者と相談して、皇后をどのように埋葬するかを尋ねた。重臣達は答えた。『倭彦命の古代の先例は堅く従うべきである。』ところがあなた〈帝〉の家臣の先祖、野見宿称が思い切って言った。『殉死者を埋葬する儀礼は、慈悲深い政体の本質に反するものである。重臣の不合理な意見が続く限り、国家に利益をもたらしても、人道的に背くものである。』彼はその結果300人位の陶工集団を連れてきて、自ら指導して粘土を取らせ、様々な物の像を作らせ、それを帝に献上した。帝は非常に喜んでそれらを殉死する人々の代用にさせた。それらは埴輪、または立てもの（立っている物）と呼ばれた。」<sup>(註16)</sup>古事記の中ではこの風習の記事は非常に簡単に扱っている。しかし、それらは日本書紀の中と同じ2人に言及している。倭彦について、それは簡単に言っている。「この皇子の葬式に際して、多くの人柱が初めて墓に建てられた。」“倭彦の古代の先例”という表現が陶工集団の言上で使われたこと等を考えてみると、本居〈宣長〉の結論は、「殉死の習慣は古代にはあったものの、この皇子の葬儀の時に非常に多数の犠牲者を出した最初の事例であった。」と考えているようである。古事記の別の言及は我々にはほとんど語らず、単に次のように言っている。「彼の皇后である日葉酢媛命の葬儀に当たり、石棺の職人と、陶工の職人が指名された。」ハニ氏は古代には土器を作る人の一般的呼称であったようである。和名抄（約960年）に河内、和泉、上毛野、下毛野、丹波、因幡、備前、阿波（四国の）、筑前、筑後にある12カ村が土器生産からハニ、ヘ氏、ハ氏という名を採用したと言われている。皇子や偉大な人の墓に仕える者や、馬を殺すという習わしは、埴輪樹立によって完全に消え去ったわけではない。後の646年に統治している帝は、いわゆる大化の薄葬令〈大化2年3月甲申日詔〉を発し、葬式の注意と共に、まさにこの種の残酷で無用な殺戮を禁止することを謳っている。その中には非常に興味深いことが書かれている。それは、皇子や高い身分の家臣から庶民まで、あらゆる階層の人々の場合に於いて、石室の大きさと、その上に造られる古墳の大きさが定められている事である。例えば皇子は、内径で長さ9フィート、幅5フィートの石室に埋葬され、一辺72フィートの方形で、高さ40フィートの墳丘で覆われる。1000人の労働者がその建造に雇われ、その労働は7日で完成させねばならなかった。最も高い身分の役人の石室は、皇子と同じ大きさであるが、墳丘は一辺56フィートの方形で、高さ24フィート、半分の500人の労働者を雇う事が許されている。皇子は車で墓に運ばれることができ、高い位の役人は運搬人の肩にかつがれることができる。庶民は死んだその日に地面に埋葬されねばならな

ったし、その墓の上に墳丘をつくることはできなかった。その時代までは、死者の家族が最も埋葬に適した場所に埋めていたのを、彼らを収容するための特別な墓域を設定することをその時命じた。法令はさらに続けている。「死者に従うために自殺したり、死者に従わせるために他人を絞殺したり、死者の馬を殺したり、死者のために財宝を墓に納めたり、死者のために髪を切ったり、ももを刺して誅（しのびごと）をしたりするような旧俗の総てを停止せねばならない。」布告の他の写しは付属文を多く含んでいる。即ち「金や銀や錦や菱形地紋のある麻布や、いかなる種類の染め物も埋めてはならない。」<sup>(註17)</sup> この一節は、大室や大屋の古墳の年代を決定するのに役立つと考えられる。というのは、それらは大きさや形に関して、ここに定められた法令に準拠して築造されていないし、さらに金、銀、財宝として分類される多量の副葬品を含んでいるので、それらは布告が出された年、即ち646年より古いと推論することができる。そしてもし、地方伝説が万一適当であるとすれば、これらの古墳の築造年代はこの時期よりずっと古いといえる。雄略紀（日本書紀卷14）の中に興味ある逸話がある。雄略天皇の治世はA. D. 457～479年とされており、この話はこれらの古墳に埴輪像を埋めた風習を傍証している。「ある男が古墳の近くを馬に乗って通りかかると、赤毛の非常に素早い馬に乗った人と偶然出会った。彼はその馬が非常に気に入りに、独力でその馬を手に入れたいと思って追跡した。しかし、その見知らぬ人に決して追いつくことはできなかった。ところが、その人は彼の望みを見抜いて、一寸の間止まって彼を待ち、交換を申し出た。騎馬武士はもちろん喜んで受け入れた。そして、家に帰ると彼の新しい愛馬を馬小屋に入れた。翌朝、馬小屋に行ってみるや否や、馬が埴輪に変わっているのがわかって彼は非常に驚いた。そして、彼はその大胆な企てに遭遇した場所に再び行くと、古墳の埴輪馬の間に、彼自身の軍馬を見つけることができた。そして、言うまでもなく、彼はすぐにそれを取り戻した。」

最後に本論を書くに当たり、内務省の次官補シナガワ氏<sup>(16)</sup>や群馬県事務長オキモリタカ氏<sup>(17)</sup>、古墳を訪れるに当たって私に便宜をはかり、その遺物のスケッチ図に協力いただいたハセガワキヨミ氏<sup>(18)</sup>（その人は前橋から大室まで私と一緒にだった）、村の長老、ネギシジフジロウ氏<sup>(19)</sup>（その人の家には収集物が保存されている）等、関係各位に感謝する次第である。

#### 【原典註】

- (註1) 〈エドワード・シルベスター・モース「大森貝塚」『東京大学理学部紀要』第1巻第1冊（1879）参照
- (註2) 〈ジョン・ミルン「小樽および函館出土の石器について—日本先史時代の遺物についての若干の一般的所見とともに—」『日本アジア協会紀要』第8巻第1冊（1880）
- (註3) 群馬県庁所在地の前橋より7マイル東で、東京から街道で来ると通る伊勢崎町より北に5マイルの位置である。
- (註4) 挿図参照
- (註5) この単位は当初は日本尺で測定し、その後1.19を掛けてイギリス尺に直した。小数点第2位は厳密には正確でない。
- (註6) 上武士
- (註7) 姓氏録〈と脚註には記されているが、これらの記事は『新撰姓氏録』よりもむしろ『国造本紀』が詳しい〉。

- (註8) もしくは上毛野君及び下毛野君と姓氏録の中で彼らは呼ばれている。
- (註9) すなわち5日
- (註10) すなわち2日
- (註11) 桃花鳥は「つき」と読む。
- (註12) すなわち6日
- (註13) すなわち葬式から何日か経過した後〈もがりの期間〉。
- (註14) 一部ではヌミと読むが、通常ノミと読む。
- (註15) もっとも古典的な註釈である。また、別の呼び名は「たてもの」即ち立っている物という意味である。和名抄巻14第210〈と脚註には記されているが、実際には巻140 第190 葬送具の項に記載されている〉では埴輪は粘土製の人形と定義している。古墳の縁に荷車の丸い車輪のように直立して配置されたのであろう。
- (註16) 『続日本紀』巻39第44〈と脚註には記されているが、実際には巻36光仁紀天応元年6月25日の条に記載されている〉。
- (註17) 『日本書紀』巻25

## ②……………現地調査から執筆に至るまで

### (1)遺物出土の経過

サトウがこの文章で報告している前橋大室古墳群は、1878年に石室が開口して遺物<sup>(20)</sup>が出土している。『群馬県史』等では、狐、猪の類<sup>(21)</sup>を捕獲するために掘った穴が偶然に、石室に当たったと表向きは語られているが、『古制微証』に紹介されている井上真弓の書簡によると、「村吏の許可を得て2月の下旬より開壘を始め、古墳に参集した人員は毎日数百人」と記していることから、一応、公式に行われ、且つ相当大規模であったようである。前二子、後二子両古墳の石室部分の発掘には、3月21日から4月1日までかかっているらしい。後二子古墳が開口したのは1878年3月21日で、22日、23日の両日をかけて遺物を調査して取り上げている。引き続き、3月24日に前二子古墳が開口して、翌25日より4月1日までかかって出土遺物と内部の調査が行われたようである。地元区長の根岸重次郎より『室内出品書上簿』<sup>(22)</sup>が県令楫取素彦に報告されたのが3月31日で、その報告を受けて4月13日には、楫取から徳大寺實則宮内卿へ上申されている。一方、井上真弓は、4月4日に遺物図を作成して4月14日付けで菅政友に書簡を送っている。県令の報告を受けて、10月22日に宮内省より2名派遣の達示<sup>(25)</sup>があり、11月25日に大沢清臣、大久保忠保が実査している<sup>(26)</sup>。この年は明治天皇の北陸東海巡幸があった年で、宮内省の調査に先立つ9月4日に群馬県庁内にて、これらの遺物(前二子、後二子、大黒塚古墳等出土品)<sup>(27)</sup>は天覧に供したという。そのことから岩倉宮内大臣より提出の口達があり、1878年12月5日に御巡幸掛太政官少書記官谷森眞男に照会、その回答を受けて、1879年2月3日に宮内省に提出したとされる。群馬県立文書館に残る公文書<sup>(28)</sup>では、1878年12月14日に大室出土遺物並びに、上武士出土遺物を宮内省に転送した行政文書があることから、日数に若干の齟齬があるものの、提出の事実は裏付けがとれる。1879年3月17日に宮内書記官から、「献納したのは県か又は所有者か、買い上げてもよいのなら、いかほどの代価がよいか。」という様な照会があったので、3月19日にいままでの経緯を説明した回答をおこなったところ、3月27日に遺物は全て戻ってき

たようである。その後、1879年9月に印刷局長大蔵大書記官得能良介から調査報告を編集するので、古墳略説、古墳図、遺物図等をおくってほしい旨の依頼があった<sup>(29)</sup>。その公文書は1879年10月16日付け印刷局長、得能良介より群馬県令、榊取素彦あてに「古墳及び古器物の細密絵図の調整依頼」が群馬県立文書館に残されている<sup>(30)</sup>。得能良介による文章は諸田（1927）で記しているように「印刷したや否や余は之を聞知しない。」とされ、諸田が掲載している図はこの際に得能良介に提出したものである<sup>(31)</sup>という。

一方、大黒塚古墳出土品については、文政年間に地元の石工、山口豊蔵等によって発掘されたものを当時の産泰神社神主が社宝として保存したものである。サトウが60年位前に発掘されたと記していることも適合する。このときの発掘に関与した人の最後の生き残りが3年前即ち1877年に死んでいる。かつて産泰神社が発行していた『産泰神社の景』によれば、サトウの紹介以後、明治年間にウィリアム・ゴーランド<sup>(32)</sup>が調査にきているらしい。その後、1888年の『上野国郡村誌』でスケッチ図が紹介されているがサトウの精度には劣る。

上武士の出土遺物については、どの古墳から出土したものかは同定できない。但し、文政年間に上武士天神山古墳群の円墳が数十基開墾され、「土偶人土馬を得たり」という記述がある<sup>(33)</sup>。サトウの60～70年前の出土という記述と適合することから、おそらく、天神山古墳群の出土品と推定される。どのような経緯で保泉の鈴木家へ遺物が入ったのか詳細は不明である。また遺物類の所在も現在は不明となっている。

## (2)サトウの調査経過

遺物出土以後の大室村は、毎日数百人の見物人が集まり大騒ぎとなつたらしい<sup>(34)</sup>。群馬県立文書館の根岸家文書にみえる「古墳神器拜礼人名誌」によれば、1878年4月10日から1879年6月2日までの間に見学を訪れた人数は5179人に及び、<sup>(35)</sup>



サトウが訪れた頃の産泰神社（1879年3月）『浮世絵版画に見る上州』より

県外では関東地方を中心として、遠くは滋賀県、愛知県、石川県からも見に来たことが記載されている。さらに、天覧や宮内省提出ということが拍車をかけ、ついには、東京に居たサトウの耳にも入ったものと推定される。出土遺物を実際に目の当たりにしたいと思い、1880年に前橋・大室を訪れている。<sup>(36)</sup>『サトウ日記』では、3月6日に江戸を加藤竹斎<sup>(37)</sup>という画家<sup>(38)</sup>、従者とともに発ち、その日は熊谷の先で中山道から北に折れ、利根川畔の中瀬（現深谷市中瀬）で宿をとっている。その後の足取りは不明であるが、おそらく境町から伊勢崎あたりに出る行程をとり、3月7日の12時20分前に前橋に到着。油屋旅館で休憩している。そこで沖と長谷川に会っている。『日記』では、沖とは9年前に知り合ったと記していることから、サトウが再来日した1870年の翌年に、東京の公使館勤務をしていた当時に初めて知り合ったものと思われる。沖は、1871年10月に岩倉の随行人として訪欧しているのだから、それ以前であろう。長谷川の案内で大室まで行ったと記している。大室では、地元の古老、根岸や産泰神社の神主、鯉登のコレクションを見たあとで古墳を訪れている。その後は、宿に戻って夕食をとったと記しており、前橋の油屋旅館までわざわざ戻っているのか、あるいは現地で宿を探したのか明らかでない。翌日も引き続き、大室の出土遺物類を見学、実測したりスケッチしたりして一日を過ごしたらしい。鯉登のコレクションも再び見に行っている。9日は、保泉に向かつて、鈴木<sup>(39)</sup>のコレクションを見学する。すでに保泉の資料に関しても、宮内省提出の際に公になっていたもので、おそらく、サトウは当初から寄る計画でいたのではなかろうか。この日は熊谷の近くにある、きさらぎ茶屋<sup>(40)</sup>で遅い昼飯を食べ、鴻巣の塚本旅館<sup>(41)</sup>に泊まっている。3月10日は早朝に出発して、板橋で昼飯をとり、古墳があるとされる白山権現に寄って江戸にもどっている。なお、最後の3日間は神経痛に悩まされたという。この旅行でサトウの移動した距離は、初日85.7km、2日目35.5km、4日目53.5km、5日目52kmと、総距離226.7kmに及んでいる。初日はおそらく、何かの交通機関を利用したと思われるものの、それ以外のほとんどを徒歩で移動している。『日記』をみると当時まだ珍しかった異国人に対して、地元住民からは奇異な目で見られたり、犬に吠えられたり珍道中が続いたようである。

### (3) 発表雑誌について

サトウが多くの論文を発表した日本アジア協会（The Asiatic Society of Japan）については、朝日新聞に長期連載されていた「サトウ日記抄」<sup>(42)</sup>が詳しい。それらに拠ると、1872年に発足した英米系の研究団体で、当初は、ロンドンに本部を置く王立アジア協会（The Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland）の日本支部、もしくは横浜支部と云う名称になる可能性を秘めていたらしい。しかし、アメリカ側の反対によってロンドンからの独立性を保持する日本アジア協会に落ち着いた。7月29日（陽暦）に横浜外国人商業会議所で設立総会が開かれ、初代会長にイギリス代理公使ワトソンが就任している。続いて10月30日（陽暦）に横浜ゲーテ座で第一回例会が開かれた。ここで2名の会員が報告をおこなっており、その一人がサトウ本人で「Notes on Loochoo」（琉球についての覚書）と題するものであった。例会後、会長以下の役員が選出された。会長ワトソン、副会長J・C・ヘップバーン（ヘボン、アメリカ宣教師）、H・ハドロウ（イギリス海軍軍医）、書記E・Wサイル（イギリス宣教師）、会計R・Bベーカー（イギリス商人）、図書係H・プライヤー（イギリス商人）、評議員にはサトウの外、S・Rブラウン（アメリカ宣教師）、F・Vディキンズ（イギリス弁護士）、R・Bロバートソン（イギリス横浜領事）、A・Jウィルキン（イギリス商人）、W・Gハウエル（イギリス

『ジャパン・メール』紙発行人)が選ばれた。協会発足後、第一年度の会員数は、名誉会員2名、通信会員3名、居住会員109名、計114名で、会員を国籍別に見ると、イギリス77名、アメリカ24名、カナダ3名、ドイツ、ロシア、ベルギー、スペイン、日本各一人であった。唯一の日本人会員とは森有礼であった。会員の約9割は横浜居住者であったと推定される。ちなみに本会に対抗して、翌年にドイツ系の研究団体、ドイツ東アジア協会も発足している。

サトウはこの協会の例会において、毎年1、2回の報告を行い、中心的な会員の一人になっていた。それらの報告を基礎にして、協会が毎年刊行したのが『紀要』(Transaction)であった。

### ③……………サトウが調査した古墳・遺物

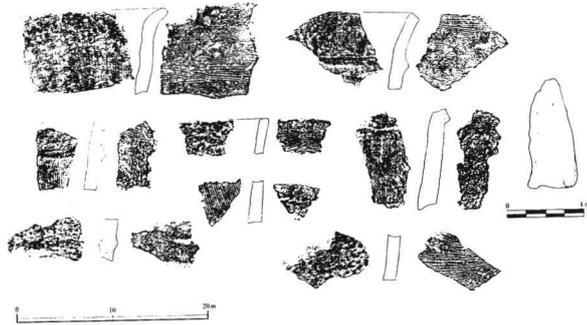
#### (1)サトウが訪れた古墳について

サトウがこのとき訪れたと推定される古墳について、近年の調査例も含めて整理してみたい。サトウがスケッチしている形象埴輪の人物像<sup>(43)</sup>は、現在も産泰神社に伝わる出土遺物で、出土したのは神社境内南側に現存する大黒塚古墳の出土品である。1888年には『上野国郡村誌』にも記載されており、筆者等がかつて実測調査を実施している。その実測図によれば、全長46m、後円部径26m、高さ3.5m、前方部幅17m、長さ24mの規模を有する前方後円墳である。後円部が東側で、主軸をN-61°-Wの方向にもつ。埋葬主体部は、後円部にある横穴式石室と推定される。墳丘上には埴輪列が巡っていたと推定されるが、葺石は認められない。副葬品として、倣製乳文六鈴鏡、硬玉製勾玉、金環1、須恵器の提瓶1、甕1が出土している。円筒埴輪は、1次調整タテハケメによるもので、口径30cm 2条3段によると考えられ、墳丘基壇面に囲繞されていたものと推定される。形象埴輪類は、サトウの紹介している人物像のほかは小破片が確認されているのみである。<sup>(45)</sup>大屋村の2基の前方後円墳とは、この大黒塚古墳と阿久山古墳であり、近年の調査ではさらに、大稲荷2号墳が確認されている。ところで、既に紹介されている唐沢定市氏の解説<sup>(46)</sup>には大きな誤りがある。サトウのスケッチした遺物を阿久山古墳出土品に比定している点である。阿久山古墳は、過去に3回調査されている全長44m、後円部径35mの規模をもつ前方後円墳である。埋葬主体部は自然石乱石積による横穴式無袖式石室で、長さは6.2m、奥壁幅2mであった。墳丘上には円筒埴輪列のほか、形象埴輪翳、馬、人物埴輪等が配列されており、副葬品に大刀1、刀子1、鉄鎌15、金環6があった。円筒埴輪はどれも1次調整タテハケメによるもので、2条3段によるものと考えられる。

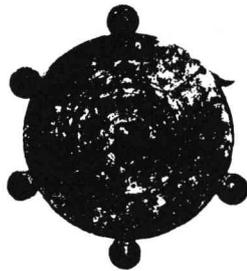
この外、小二子古墳、内堀1号墳、荒砥天神1号墳なども前方後円墳もしくは帆立貝形古墳である。<sup>(48)</sup>

近年、これらの小前方後円墳が赤城山南麓地域に集中する、地域色をもった特徴的な形態を有する古墳であるという注目すべき指摘がなされている。<sup>(49)</sup>

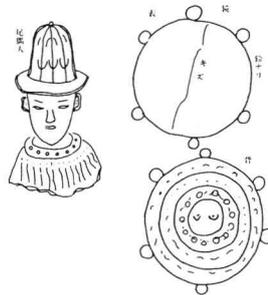
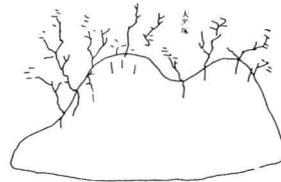
いわゆる、基壇と呼ばれる、周溝によって区画される旧表土部分を見かけ状の一段目とする。平面形は前方部側の幅は広いけれども、長さが短い寸胴な形態を呈する。それに比して盛土で構成される二段目の前方部は細く長い形態である。即ち、基壇の幅を広く持ち、幅狭の周溝は、一般的な前方後円墳に見られる平面盾形もしくは馬蹄形になるのではなく、墳丘と相似形、即ち、前方後円形に一巡らされる。但し、こうした盛土を少なくして大きく見せる、省力化ともとれる墳丘構造は、



円筒埴輪ほか破片 (註45文献より)



六鈴鏡 (産泰神社蔵)



『上野国郡村誌』掲載図

Property of Kohito Mamiishi

This was a sitting fig. with the hands on the knees narrow sleeves. dug up abt. the end of Nara-Sci. set up by the side of the road. knocked about by the children & the children must have their heads almost left.



height 11.7 (寸)

サトウ「トラベリングノート」スケッチ図 (註4文献より)



人物埴輪 (産泰神社蔵) (註43文献より)

サトウが調査した遺物 (大黒塚古墳出土品)

本地域では、小型前方後円墳だけに認められる特徴ではなく、小円墳や3基の大型前方後円墳にも共通して看取される構築方法である。<sup>(51)</sup>

サトウが述べている大室の前方後円墳3基とは勿論3二子古墳である。近年、大室公園の史跡整備事業に伴っていずれも調査され、新たに重要な発見が相次いでいる。南側の前二子古墳は、全長93.7m、後円部径68.8m、高さ14m、前方部幅64.8m、2段築成による前方後円墳である。周囲には周溝を巡らし、その外側には外堤も確認されている。埋葬主体部は、横穴式両袖式石室で、後円部の南側に開口していた。副葬品はサトウが紹介している以外では、ガラス製青色小玉130、同緑色小玉17、同黄色小玉28、水晶製丸玉14、碧玉製管玉2、滑石製管玉1、滑石製白玉1、銀製空玉3、金製耳環1、辻金具、鞍金具、矛、刀、鉄鏃多数、鉄製農具雑形品（刀子1、斧1、鋤1、鑿片3）、針状金具、釘、鉤状金具の出土があり、副葬品の配列や年代観から単独葬であると考えて問題ない。<sup>(52)</sup> また、石室構造は九州系の影響が指摘されている。<sup>(53)</sup>

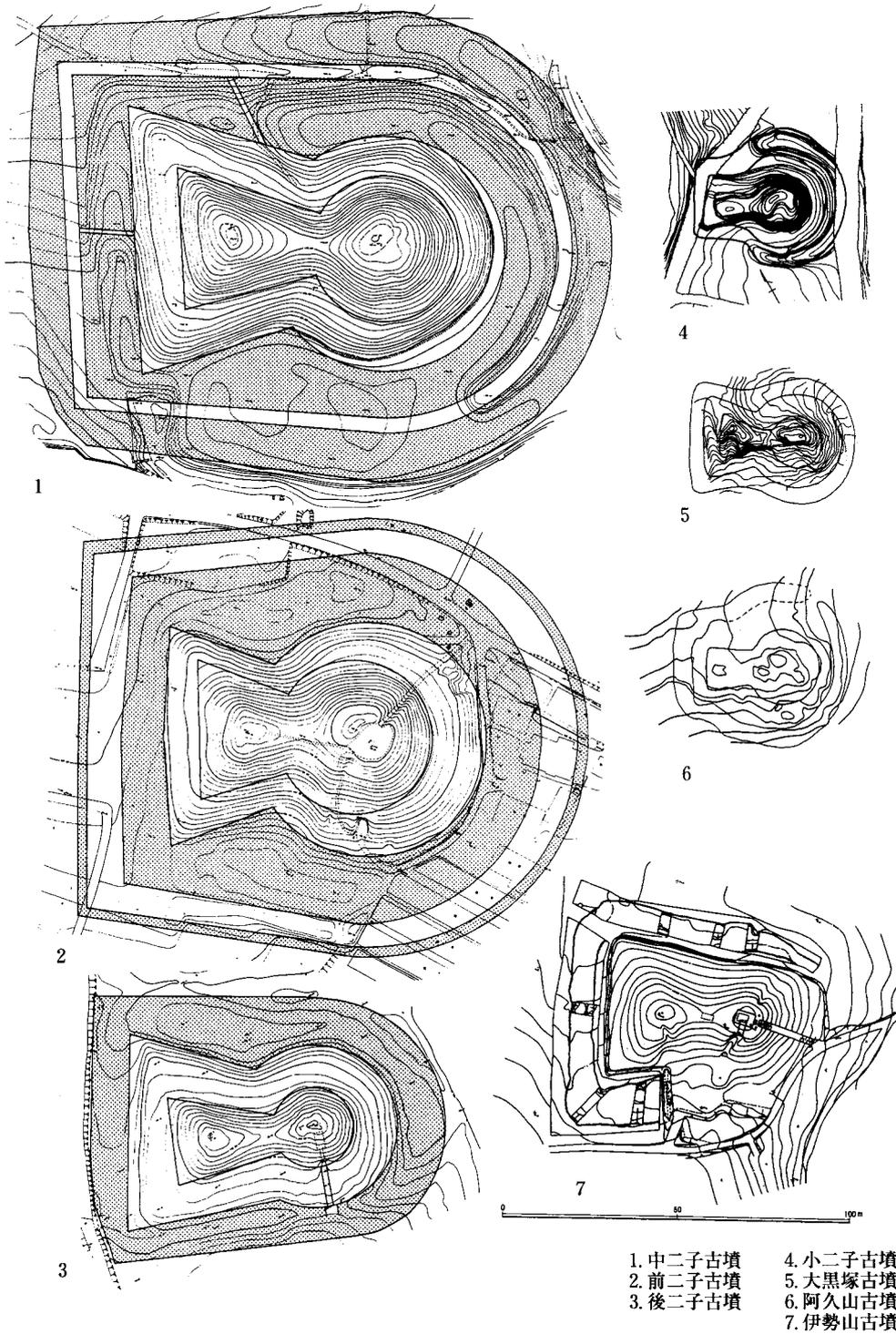
埴輪列は墳丘基壇面、墳頂部、外堤上の内外縁に巡らされていた。円筒埴輪、朝顔形埴輪の外、形象埴輪には人物、馬、盾、鞆、家、大刀、矛、蓋、盾持ち人が配列されていた。これらのうち、馬は墳丘上から、人物群及び器財類は、墳丘と外堤の両者から出土している。中二子古墳は全長111m、後円部径65.8m、高さ14.8m、前方部幅78.8mの規模を有する、本地域最大の前方後円墳である。サトウも二重周溝であることに気づいており、3基の中で最も位の高いことを指摘している。サトウは大室を訪れた前年の、1879年に伊勢神宮から畿内周辺を見学して回っており、<sup>(54)</sup> 堺周辺も訪れていることから、おそらく畿内の大王墓を見た経験からこうした推論を行っているものと考えられる。埋葬主体部は不明で、おそらく横穴式石室を有すると推定されている。埴輪列は墳頂部、墳丘下段平坦面、中堤内外縁に圍繞されていた。確認されている人物群はいずれも後円部南側中堤上で、その在り方は保渡田八幡塚古墳等に代表される5世紀的な様相を呈している。墳頂部には器財埴輪群として鞆、鞆、翳、大刀等と盾持ち人の形象埴輪、人面付き円筒埴輪等が出土している。後二子古墳は全長85m、後円部径48m、高さ11m、前方部前幅59.5mの規模を有する前方後円墳である。埋葬主体部は横穴式両袖型で、副葬品として、須恵器高杯、提瓶、大刀3、小刀1、刀子、鉄鏃多数、轡1、耳環11等が出土している。石室内部から出土する副葬品の時間幅がかなりあり、人骨の出土等からも複数の埋葬者がいたことを裏付けている。<sup>(55)</sup>

サトウは、伊勢山古墳の周囲に5基の円墳があったと記しており、1988年度の群馬県教育委員会による発掘調査では、周辺から15基の円墳跡が確認されている。<sup>(56)</sup> おそらく、サトウが訪れたときに、墳丘が残存していたのが5基程度であったのであろう。伊勢山古墳は、前方部、後円部ともに2段築成の前方後円墳で、全長67m、後円部径42m、高さ5.5m、前方部幅47.5m、長さ30m、高さ5mの規模を有する。埋葬主体部は、複輝石安山岩の自然石乱石積で、全長4.8m、幅2.1mであった。発掘調査の結果、本古墳は埴輪及び葺石を持たないらしく、群馬県内の前方後円墳としては異質な感を受ける。出土遺物に耳環10、人骨等がある。<sup>(57)</sup>

なお、サトウは保泉では上武士天神山古墳群から出土したと推定される埴輪を実見しているが、時間がなかったため、残念ながら古墳を見て回る余裕はなかったようである。

(2) サトウ調査遺物の  
所在

近年の前二子古墳の調査では、石室内部から数多くの出土遺物が見られた。これらの内、サトウの調査した須恵器直口壺、装飾付筒形器台、



サトウが訪れた古墳

大型高環形器台の破片が出土しており、接合関係が確認されている。特に、直口壺については舗石の下から出土しており、明治期の調査が床下にまで及んでいたことの傍証となっている。前二子・後二子両古墳の出土遺物はその後、長く地元で管理することになり、大室神社に保存されてきた。その間に前二子古墳出土の鏡は盗難に会い、残念ながら現在は、所在不明となっている。土器類のみ1935年12月18日に旧国指定重要美術品に認定され、行政による管理がなされるようになってきた。とくに、装飾器台については、その付着している小像が四神を表現しているのではないかという間違っただ見解から四神飾り付き土器という名称でつい最近まで呼ばれていた。詳細に観察してみると、鳥(朱雀に想定)する部分を南に固定して時計まわりを見ると、白虎がくるはずの西側には亀があり、玄武があるはずの北側は欠落して不明な小像、青龍があるはずの東側には蛇がおり、しかもその前には蛙がいる。これらは、韓半島でよく見られる装飾器台と比較してもなんら遜色はない。ただし、焼成のあまさは他の須恵器類と同様であり、おそらく在地で製作されたものと推定される。

また、大黒塚古墳出土遺物については、サトウの紹介したことで全国的に有名になり、その後、ウィリアム・ゴerlandも実査に来ている。また、東京帝国大学の坪井正五郎の仲介のもと、リポフル・ボウエスは金額に糸目をつけたいから譲って欲しいと申し出たらしい<sup>(59)</sup>。しかし、一度、天覧に供したものであるからという理由で断り、現在も六鈴鏡、人物埴輪、須恵器甕等は産泰神社社宝として保存されている。

鈴木家の遺物については、宮内省が調査した頃には、長持に入れて保管されていたらしく、群馬県立文書館に残る古文書には長持一棹ごと提出した記述が見える。

### (3) サトウ論文の評価

後に、東京人類学会の創設にもかかわっている白井光太郎は、東大の図書館でこの「上野地方の古墳群」を見つけて衝撃をうけたという<sup>(60)</sup>。特に、図の精緻な点と、考証に文献史料をもちいている点などは当時としては斬新に映ったに違いない。彼は実際に、群馬県安中市築瀬二子古墳の出土遺物を同様の手法で考察している。サトウがモースやミルンの論文に刺激を受けたのと同様の展開に、輪廻を感じずにはいられない。サトウが論述した中には、明らかに間違っただ考えもある。しかし、現在の研究レベルで考えても評価されるべき点も多い。特に注目されるのは、この当時で既に、朱やガラス玉の自然科学的分析を行っている点である。いまでこそ日常的に行われているこうした分野の研究も、日本考古学で自然科学的分析が定着するようになったのはつい最近のことであり、その先見性に驚かされる。惜しむらくは、こうした研究が後に継承されなかった点である。この当時の風潮として、大古墳の周囲にある小円墳はいずれも陪塚として見る傾向があった。サトウはきちんと調査をせねば断定できないとしている。近年の前橋市教育委員会の調査では、小円墳の時期はいずれも3前方後円墳よりも新しく、時期が異なることが明らかになってきている。

サトウはおそらく、前二子古墳の石室壁材にあった鉤状金具の存在に気づいていたらしく、鎖で棺を吊るしていたのではないかという大胆な想像をしている。これらの用途は高崎市観音山古墳例で、布の残片が付着していたことから、帷幕を張り巡らすのに用いたと推定されている<sup>(61)</sup>。類例は県内2基の外は、奈良県藤ノ木古墳で確認されている。

また、大室村の北にある見晴らしのよい場所に豪族の居館を推定していることは興味深い。百年以上もたつて梅木遺跡が発見され、さらに橋本博文氏は、多田山丘陵を越えた赤堀町の毒島城跡を

居館に推定されている。<sup>(62)</sup>サトウが指す遺跡がこれらに相当するのならまさに正鵠を得た見解となるものの、外の土手が完全に原型を保っていると記述しており、居館跡がこの当時にこれほど良く残っているはずはないので、おそらく後世の所産と考えられる。大室の北側と明記していることから、大室元城跡が有力視される。前橋市教育委員会によって発掘調査されており、<sup>(63)</sup>図示したとおりである。該当したものについては間違っていたものの、結果的には、近年多数発見されている豪族居館跡の存在を予言しており、サトウの推測は百数十年後に実証されることになる。サトウのこの指摘は、豪族居館研究史上もっとも初源期に位置付けられる点で重要な位置を占めている。サトウは実際に実見して記述しているのか、あるいは他の古墳例から推測で述べているのか、朝顔形埴輪が埴輪列の隅（コーナー）部にあると論述している点は興味深い。必ずしもこの位置に置かれるとは限らないことは、近年の多くの調査例が物語っている。ところが偶然に、後二子古墳の発掘調査では、隅部に配置されることが確認されている。<sup>(64)</sup>しかし、前二子古墳については調査範囲が狭いため現状では明らかでないらしい。

このほか、木棺の材について、コウヤマキが多く用いられていることを指摘している点も興味深い。『日本書紀』等の文献史料からの引用と思われるものの、より現代的な着眼点に敬服するものである。なお、サトウはかつて伊勢神宮の研究をしたことから、神道、延いては国学全般についての造形も深い。本居宣長や平田篤胤をはじめ、古事記に関する著作を持ち、本居の『古事記伝』の一節を持ち出せるのはこうした予備知識の上に成り立っている。

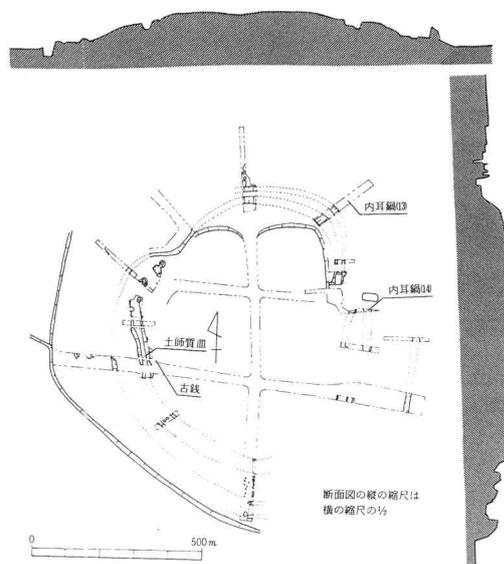
こうした中で、最も重要な指摘は、大化の薄葬令の規定内容から古墳の年代観を求めるといふ考え方をいち早く提起している点である。従来の研究史では、1898年に黒川真道が始めて論述したのが定説とされていた。<sup>(65)</sup>黒川に先行すること18年、外国人によってこうした学史上重要な指摘がすでに行われていたとは留意する必要がある。一方でサトウは、『記紀』の神話に見られる年代観については全く信用していない点はおもしろい。日本の研究者がこの後に、半世紀以上も皇国史に彩られることになることを、この当時誰が予想したであろうか。

#### (4)古墳及び遺物の年代観

サトウがスケッチした埴輪を出土した

大黒塚古墳については、現在も神社で保存する須恵器の年代から、TK 10型式期に想定され、3二子古墳と大差ない時期の所産であることが考えられる。一方、その南側にある阿久山古墳については、副葬品の年代観は不詳であるものの、おそらく、6世紀前半代に比定されるものと考えられる。埋葬主体部は、横穴式袖無型石室で、付近で産出する輝石安山岩を用いた自然石乱石積で南方向に開口していた。

前二子古墳の年代的位罫付けについては、研究者間での異論は少ないようである。須恵



大室元城跡平面図

器の年代観は、陶器編年のMT 15型式の範疇で捉えられることができる。但し、土器の個々の時間差はあると考えられており、装飾器台はやや古相である<sup>(67)</sup>。埴輪の年代観では、2次調整横ハケメは極めて少量残存するものの、ほぼ省略されていると考えられる。また低位置突帯も採集されているとのことである<sup>(68)</sup>、今回の調査では確認されていない。貼付口縁についても同様である。形象埴輪類は、石見型盾、蓋等古相を示すものの、人物群が墳丘部から出土していることから、中二子古墳より後出要素として捉えることができる。

かつて筆者等は、中二子古墳の築造時期については、周溝内より採集されたとされる補強体付き須恵器大甕の存在から、あるいは角閃石安山岩使用の可能性も考えて6世紀中葉の位置づけを想定したこともあった。ところがその後、発掘調査された出土埴輪の年代観からは、6世紀の後半にずれ込む可能性は否定的である<sup>(71)</sup>。特に、写実的な器財埴輪の靱に描かれている鉄鍔の形式学的位置づけや、円筒埴輪類に前二子古墳同様、極めて客体的ではあるが2次調整横ハケメが残存する点等は、築瀬二子塚古墳や、七奥山古墳等でも看取することができる様相であり、中二子古墳の年代観は、前二子古墳に先行する可能性すらでてきた。しかし、墳丘については断片的なトレンチ調査であるので、あくまでも確定したものではない。

3基の中で最も問題なのは、後二子古墳の位置付けであろう。筆者は、後二子古墳の発掘調査がはじまる以前の、1989年に既出遺物や石室構造の編年観から、6世紀第Ⅱ四半期に比定した<sup>(72)</sup>。特に、『群馬県史』で前二子古墳出土遺物と誤って掲載していた須恵器高坏の時期や、複数ある出土馬具のうち、橋金具連結法による素環環状鏡板付轡の年代観については、MT 15～TK 10型式期にまで遡る可能性が指摘できることから、調査後の現在もその年代観を変える必要は無いと考えている。ところが調査者等は、石室前から出土した土師器類が内堀M-1号墳と類似している点と、石室の用材が大型の石材を用いているという理由から、巨石巨室墳の系譜で捉え、墳丘基盤に確認される榛名山テフラ層を、FP層と断定して6世紀中葉～後半に位置づけた<sup>(74)</sup>。このように調査者等と隔絶の感があった年代観についても、近年、その間の溝が埋まりつつあるようである<sup>(75)</sup>。

3子古墳の外部構造を比較検討すると、墳丘規模に差があることは前述した通りである。それらに付属する周溝と外堤の関係は、中二子古墳は二重周溝で中堤と外堤があり、前二子古墳は一重周溝で外堤を持つ。後二子古墳は一重周溝だけで、堤を持たない。また、墳丘の葺石が中二子古墳では墳丘上下段と中堤に使用されているのに対し、前二子古墳では上段のみ葺石が使用され、後二子古墳は全く使用されていないという格差を生じている。こうした構造差を時間差と捉えて、3基の中で後二子古墳の築造時期だけ後出させる考えが主流をしめていた<sup>(76)</sup>。こうした難題は棚上げにしたまま、最も新しい〔前原1997〕では、石室入口部分の出土土器の年代をTK 10～MT 85の時期に修正しており、筆者等が以前から述べていた年代観にかなり近づいてきた<sup>(77)</sup>。葺石の有無が時間差を示すものではないことは、さらに後出する、金冠塚古墳、観音塚古墳、総社二子山古墳、前橋二子山古墳、前橋不二山古墳等が葺石を有することからも明らかであり、前期の元鳥名將軍塚古墳等では逆に葺石が無い<sup>(78)</sup>。また、内部構造の差については以前に、前二子古墳石室は単独葬であるのに対して、後二子古墳は、副葬品の内容から追葬を受けた家族墓であることは明らかであり、こうした、用途の差が石室構造の差となって現れている可能性を指摘している<sup>(79)</sup>。その後、後二子古墳の調査では実際に遺骨が複数体確認されており、残存していた人骨の医学的検知からは、女性という鑑

定結果が下されている。<sup>(80)</sup>あるいは、本墳に子女のみが埋葬され、前、中二子古墳には成人男子がそれぞれ単独に埋葬されているのかも知れない。群馬県内の横穴式石室を持つ、大型前方後円墳を通観してみると、単独葬というのはむしろ稀であることが解る。副葬品の内容から、観音山古墳、築瀬二子塚古墳等が可能性をもっている。<sup>(81)</sup>

なお、後二子古墳横穴式石室の、玄室最大幅が265cmと広いことから、技術的問題から時間を下げる意見もあるが、<sup>(82)</sup>群馬県地域に横穴式石室が導入される、MT 15型式段階に畿内では、八尾市愛宕塚古墳のように、最大幅300cmを極端な持ち送りをせずとも、天井石を架構させる技術は存在しており、根拠とならない。後二子古墳よりも墳丘規模は小型の円墳であっても、より巨石を用いている点に留意しておきたい。<sup>(83)</sup>こうした傾向は、畿内以外の地方でも看取することはできる。<sup>(84)</sup>群馬県内の横穴式石室墳を再検討すると、石室内出土の土器類に比べて、石室前庭部の土器は新しい場合が多いことが確認できる。<sup>(85)</sup>特に追葬が認められる古墳については、その格差が大きいことも指摘できる。別稿で編年したとおり、後二子古墳石室内の出土遺物には、6世紀第Ⅱ四半期でも古い位置づけが想定できる一群があり、追葬をされたある段階で、墳丘の修理、あるいは整備のような行為を看取することができる。<sup>(86)</sup>こうした時期に石室前祭祀行為が行われたと考えると、必然的に古墳自体の年代は、石室入口部出土の土器類よりも古くなり、石室内出土遺物の年代観と辻褃があ<sup>(87)</sup>ってくる。

### まとめ——3 二子古墳の群馬県地域での位置づけ——

前述したとおり、前橋市大室3 二子古墳は、それぞれ近接した時期に相次いで築造されており、西毛地域の、保渡田古墳群と在り方が類似している。仮に、これらが同族の墓地群であるとするならば、その関係は世代で捉えるより、同胞と考えた方が妥当なものである。前橋大室古墳群の3基の外部構造を、5、6世紀代群馬県地域の前方後円墳と比較して見ると、表1のようになる。

表1に掲げた古墳は、厳密には時期や地域等が違っているので、すべてを同列に扱うことには問題がある。これらを判断の指標として利用する場合は、比較検討の際に時間軸や地域差の問題、段築や周溝の違い等を考慮する必要があると考えている。それらを加味して、調査により確実なものだけを抽出すると表1からつぎの分類が可能である。<sup>(88)</sup>

- A類 墳丘すべての段と中堤、外堤に葺石がある。……七輿山古墳
- B類 墳丘すべての段と中堤に葺石がある。……中二子古墳
- C類 墳丘すべての段に葺石がある。……王山古墳，  
井出二子山古墳，保渡田八幡塚古墳，  
前橋二子山古墳，築瀬二子塚古墳，  
不二山古墳
- D類 墳丘の一部の段に葺石が施される。……平塚古墳，保渡田薬師塚古墳，  
正円寺古墳，前二子古墳
- E類 葺石は全くない。……後二子古墳，観音山古墳，伊勢山古墳

表1 群馬県における5世紀後半～6世紀代の主要前方後円墳の外部施設

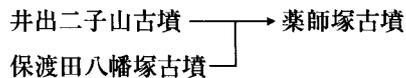
	墳丘長	段築	周溝	周堤	葺石被覆部位
中二子古墳	111m	2段	2重	中堤・外堤	墳丘上・下段・中堤
前二子古墳	93.7m	2段	1重	外堤	墳丘上段のみ
後二子古墳	85.0m	2段	1重	無	無
伊勢山古墳	67.0m	2段	1重	無	無
生品二ツ山1号墳	74m	2段	1重	外堤	有
総社二子山古墳	90.0m	2段	1重	不明	墳丘上・下段
七興山古墳	146m	3段	2重※	中堤・外堤	墳丘上・中・下段・中堤・外堤
不動山古墳	94m	2段	1重	不明	墳丘上・下段
平塚古墳	105m	3段	1重	外堤	墳丘上・中段のみ
井出二子山古墳	108m	3段	2重	中堤・外堤	墳丘上・中・下段
保渡田八幡塚古墳	102m	3段	2重	中堤・外堤	墳丘上・中・下段
保渡田薬師塚古墳	105m	3段	2重	中堤	墳丘上・中段のみ
王山古墳	78m	2段	1重	不明※	墳丘上・下段
正円寺古墳	104m	2段	2重	中堤	墳丘上段のみ
築瀬二子塚古墳	80m	2段	1重	外堤	墳丘上・下段
観音山古墳	97m	2段	2重	中堤・外堤?	無
観音塚古墳	96m	2段	1重	不明	墳丘上・下段
前橋二子山古墳	104m	2段	1重	不明※	墳丘上・下段
前橋不二山古墳	53m	2段	2重	中堤・外堤※	墳丘上・下段
金冠塚古墳	55.5m	2段	1重	不明	墳丘上・下段
大塚越3号墳	45m	2段	1重	外堤	墳丘上・下段

※七興山古墳周溝は一部3重とされる。また、王山古墳、前橋二子山古墳、不二山古墳、観音山古墳については、外堤の存否は不明であるが、葺石が無いことは確認されている。

群馬県内の状況を見ると、邑楽地方のように石材の入手困難な地域の古墳は、墳長60mクラスの前方後円墳であっても葺石を持たない古墳が存在している<sup>(89)</sup>。こうした地理的要因を除けば、墳丘を土のみで構築することは、主要前方後円墳では希有な存在である<sup>(90)</sup>。従来、葺石についての研究は、施工技術や工法に視点をおいた技術論が研究の中心となされてきており、葺石の無い事が示す意味を言及したものはなかった<sup>(91)</sup>。墳丘を盛土のみで構築した場合、雨水等の浸食を受けやすいのは事実であり、葺石の不使用は、古墳盛土崩壊を左右しかねない、その存続の本質に拘わる重要な問題である<sup>(92)</sup>。葺石をもたない古墳が新来の特種工法によって構築され、葺石の必要がなかったと言うのなら理解できるが、発掘調査の所見から盛土に技術的な差があるとは認められない<sup>(93)</sup>。古墳築造にあたっては、造営場所占拠の問題や、墳形に前方後円墳を選択できる階層がいたという事実から、被葬者の階層差による、さまざまな規制の枠組みの中で制限を受けていたことは否定できない<sup>(94)</sup>。例えば、周溝を2重、3重に造営することや、段築を2段、3段に構築するとなども経済力というよりは政治力が介在することにより説明され、それらの延長でさらに詳細に立ち入った墳丘構造の制限があったことも読み取れる<sup>(95)</sup>。

こうした問題を考える上で、前橋大室古墳群の調査成果は重要な問題を提起してくれた。3二子

古墳の所属類型は、<sup>(96)</sup>中二子古墳→前二子古墳→後二子古墳の順で上位から下位に類型され、そのことと墳丘規模との相関関係も比例している。さらに、葺石をもたない大黒塚古墳や阿久山古墳がこれらの延長線上に位置して、この下位に連ねる可能性は高い。ところで、伊勢山古墳が葺石を持たず、埴輪も持たないという群馬県内においては特種な前方後円墳であることは、同墳の築造時期が7世紀まで下ることに起因するものであろうか。遺物からの検討ができないのが残念である。仮に、埴輪をもたないことが規制の一要素になりうるならば、太田市鶴山古墳は、墳丘規模が104mと東毛で7期<sup>(97)</sup>の前方後円墳中最大規模を測るのに、埴輪と葺石が無い点は興味深い。同古墳の解釈は、橋本博文氏によって、<sup>(98)</sup>「太田古墳群の正統な後継とは認められず、政権を伊勢崎地域へと譲りわたしてしまう。」という位置付けがなされている。長持型石棺の系譜等から別所茶臼山古墳→太田天神山古墳→お富士山古墳という首長墓の系列から、鶴山古墳ははずれており、こうした要因である種の規制が働いている可能性が想定できる。一方、西毛の保渡田古墳群では、



となり、規模ではむしろ、八幡塚古墳よりも薬師塚古墳の方が若干大きいが微妙な差である。前後の時期に主要な前方後円墳が確認できず、あるいは太田地域のように広域的な動きをしている可能性もある。

古墳築造において規制が存在することは、「大化の薄葬令」やその規模となったとされる中国南北朝の律令制度にみられ、墳丘規模のほかにも、葬送にあたる人員の制限や、日数等の制限が明記されている。こうした、さまざまな規制について規範となるモデルを抽出することができれば、造墓時における政治的な葛藤を垣間見ることができるとと思われる。前述したとおり、前橋大室古墳群では、ほぼ時間軸の横系列が同じ中で、平面的にまとまった地域に規制が限定される。それらは、墳長に比例したピラミッド構造をなしており、同時期に規制の懸からない他地域では、円墳を含めたもっと小規模の古墳でも葺石や埴輪を持つことができる。こうした、小地域ごとのピラミッド構造が各地に濫立して、それらの頂点に君臨する大首長が毛野地域を統治していたという想定は誰しもが思い描きがちな理想的政治体系と思われる。しかし、実際に近年の考古学的成果より得られた様相はそんな安易なものではなく、現状で前橋大室古墳群以外で小ピラミッド構造が読み取れる地域は無い。僅かに、5世紀後半以降では最大規模の七興山古墳被葬者を頂点とするピラミッド構造の想定が可能ぐらいである。

5世紀代の古墳の場合、太田天神山古墳、お富士山古墳共に二重周溝であるがC類であり、別所茶臼山古墳に至っては、堤の存在すら確認されていないので後期の主要古墳とは在り方が違うようである。その他の地域では、調査が外周にまで及んでいない場合が多く、古墳群単位で捉えた時に、群を構成するすべての状況が明らかなものは皆無である。しかし、主要古墳を単独で概観した場合でも、墳丘規模にほぼ比例した類型を読みとることができる。こうした規制が厳格に行われている地域は、政治的支配力が強かったと考えられ、弱まると、様々な規制緩和が取り沙汰されるのは現代社会にも共通しているといえよう。

(国立歴史民俗博物館共同研究員)

訳者註

(1) — アーネスト・サトウ (Sir Ernest Mason Satow) 1843年6月30日～1929年8月26日。

(2) — 近年、彼の著作が次々に翻訳刊行されている。

(3) — 部分翻訳されたものとして、唐沢定市 (1984) 「アーネスト・サトウ」『青い目の旅人たち』みやま文庫92に紹介されている。しかし、その際に割愛された部分についても、研究史上重要な部分があることから、今回新たに全文訳を紹介し、解説を試みる次第である。以上のような理由と史料的価値を鑑み、本稿では明らかに誤っている点も出来る限り忠実に直訳するように努めた。なお、唐沢氏は出典書名を『Articles in Vol. VIII of the Journal of the Asiatic Society of Japan』としており、書名に齟齬をきたしている。この件については、学術情報センター編『学術雑誌総合目録欧文編』に記載されている、『Transaction of the Asiatic Society of Japan』をここでは採用する。この書名の混乱については、群馬大学図書館よりご教示いただいた。

(4) — 調査時の状況については庄田元男訳 (1992) アーネスト・サトウ著『日本旅行日記2』東洋文庫550 平凡社が詳しい。

(5) — 後に東京人類学会の創立に拘わった白井光太郎に多大な影響を与えている。白井光太郎 (1887) 「両野武総問古墳聴聞緒言」『東京人類学会報告』第11号 実際、彼は群馬県調査に赴いており、同様のスタイルで報文を著している。

白井光太郎 (1987) 「上野国古墳考」『白井光太郎著作集』第IV巻

(6) — 解説中で説明しているように、本論は当初、1880年4月13日に日本アジア協会の例会で発表したものを後に紀要にまとめたものである。この件に関しては、萩原延寿「サトウ日記抄」『遠い崖』朝日新聞社が詳しい。

(7) — Heinrich Philipp von Siebold (1879) 『Notes on Japanese Archeology with Especial Reference to the Stone Age』

(8) — 大黒塚古墳である。

(9) — このアトキンソンなる人物は東京開成学校・東京大学のお雇い外国人教師ロバート・ウィリアム・アトキンソン (1850～1929年12月10日) と推測され、サトウ日記に登場する宣教師ジョン・レイドロウ・アトキンソンではないと思われる。1874年9月に来日して同校で分析化学および応用化学を担当した。彼の研究テーマとして、日本酒醸造の研究、水質分析、魔鏡の研究等が

ある。

上野益三 (1968) 「ロバート・ウィリアム・アトキンソン」『お雇い外国人3』鹿島出版会

(10) — 1988年に発掘調査されている。西田健彦 (1989) 「阿弥陀井戸道上・伊勢山・大道・山王・明神山」『昭和63年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告』群馬県教育委員会

(11) — 鯉登真道 (?～大正5年4月4日) 産泰神社第16代神主、父富喜の長男として神職を継ぐ。

(12) — 鯉登富房 (文化4年～万延元年9月7日) 産泰神社第14代神主、従五位豊前守

(13) — スズキキョウタイ? 鈴木兄弟であろうか。境町教育委員会、坂爪久純氏の御教示では鈴木嚴恭 (寛政元年～天保9年6月12日) のコレクションをその子孫円蔵 (安政5年～明治22年8月7日) が応対したのではないかと推察されている。とすると円蔵、新九郎 (文久2年～昭和14年8月6日) の兄弟が該当するものと思われる。現在、鈴木家には『好事詳細帳』が残り、ハニワ瓦偶人図が描かれている。また、同家には外人が畳の上まで靴をはいてツカヅカ上がって来たり、くず屋根の家に驚いたという逸話が残されているという。

(14) — 豊国義孝 (1937) 「総社双子山の御墓前祭」『上毛及び上毛人』第241号

(15) — 蛭川式胤 (1877) 『観古図説』第一巻 (下図参照)



(16) — 品川弥次郎 (天保4年閏9月29日～明治33年2月26日) 枢密顧問官、正二位勲一等子爵、山口藩士品川弥市右衛門の長男として長門国に生まれる。吉田松

陰に師事して弾正少忠に任ぜられ1870年渡欧、1874年外務二等書記官、1875年外務一等書記官、1876年正院権大史兼内務大丞、1877年内務大書記官、サトウ来県時の1880年には内務少輔を努めていた。

(17) — 沖 守固 (天保12年6月13日～大正10年10月7日) 男爵、宗秩寮審議官。鳥取藩士沖一岷長男として江戸表に生まれる。はじめ画家を志すも、藩の外交係として維新の政局に活躍。廃藩後大蔵省に出仕。のちに特命全権公使岩倉具視に随行して欧米に歴遊、イギリスに駐まること8年。帰朝後、内務省少書記官に任ぜられる。サトウ来県当時は群馬県大書記官であった。

(18) — 長谷川清美 (嘉永4年2月生まれ) 士族、幼名を信介と称し、元前橋藩士長谷川由平に養子に入る。明治8年12月22日～13年5月5日まで県庁庶務課職務掛に在籍していた。

(19) — 根岸重次郎 (天保4年8月15日～明治23年10月26日) サトウ来県当時、西大室区長を努める。「室内出品書上簿」を報告したことで著名である。

(20) — 石川正之助 (1981) 「前二子古墳」『群馬県史』資料編3 群馬県史編さん委員会編

(21) — 井上真弓 (1878) 「群馬県二兎山古墳及び出土品図」『古制微証』『日本考古学史資料集成』より引用する。

(22) — 根岸重次郎 (1978) 「室内出品書上簿」詳細については註20文献に掲載されている。

(23) — 群馬県立文書館蔵古文書「古陵墓之件ニ付上申案」編甲第巻号 訳文は斎藤忠 (1980) 『年表でみる日本の発掘・発見史』①奈良時代～大正篇に紹介されている。

(24) — 井上真弓の図は「真物ヲ以テ図為」というように、遺物を直接置いてトレースしているようなので、大きさ等の信憑性は高いようである。群馬県立文書館所蔵「西大室村古墳祭器現形之図」参照。なお、この際の写しが群馬県立歴史博物館所蔵「大室伊勢山内堀二兎塚ノ三古墳出品」と思われる。これらの経緯については加部二生 (1989) 「西大室町歴史講座講演要旨」西大室町自治会・前橋市生涯学習推進本部及び加部二生 (1990) 「前橋市後二子古墳の出土遺物と年代観」『群馬考古学手帳』Vol.1 群馬土器観会が詳しい。

(25) — 高橋城司 (1929) 「前二子古墳」『群馬県史跡名勝天然記念物調査報告書第一輯』同書では「県庁文書」を典拠としている。

(26) — 大沢清臣ほか (1878) 「群馬県下古墳巡回記」『古制微証』

(27) — 註25文献に同じ。

(28) — 1991年1月より群馬県立文書館で行われた「根岸孝一家文書展」のおり実見した。当時、田嶋亘氏、田中尚氏には多々ご教示いただいた。

田嶋亘 (1991) 「明治十一年「古墳神器拝礼人名誌」について」『文書館だより』第16号群馬県文書館

(29) — 諸田八百七 (1927) 「四神を附する齋瓮発見の前二子古墳」『中央史壇』第13巻第9号

(30) — 註28に同じ。

(31) — 註29文献に同じ。

(32) — ウィリアム・ゴーランド (1842～1922) 英国人考古学者。1872年大阪造幣局技師として来日。1889年まで滞在している。

(33) — 加部 (1989) 註24文献に同じ。

(34) — 註26文献に同じ。

(35) — 註28文献に同じ。

(36) — 註4文献に同じ。

(37) — 一般的なイギリス人は革命を倦厭するので、サトウは維新後13年も経過しているにもかかわらず、東京と呼ばず、江戸と呼称していた。

坂田精一訳 (1960) アーネスト・サトウ著『一外交官の見た明治維新』岩波文庫

(38) — 加藤竹斎 (文政元年8月江戸生まれ) 名は督信。書を狩野恒信に学ぶ。明治初年東京大学に出仕。大学出版植物書の挿絵を多数書く。没年不祥。日記では庄田訳文、萩原訳文共にこの名前が出てくるが、現在、群馬県立文書館に所蔵されている公文書にはエルネストサトウに同行の画工として小田鎌吉なる人物名が残っている。人名に齟齬をきたしている原因は不明である。本文書を実見したのは註28と同じ機会である。

(39) — 本品は現在所在不明である。菅笠を被る農夫については、三木文雄『はにわ』所収の遺物との類似性が指摘できる。

(40) — 現在の熊谷市籠原付近にあったようである。

(41) — 現在の鴻巣市本町1丁目8-14番地で営業していたが現在は無い。1931年作成の「埼玉縣北足立郡鴻巣町市街一覽」には記述があり、昭和初期までは確認することができる。鴻巣市教育委員会、山崎武氏の御指示による。

(42) — 註6文献に同じ。

(43) — 前橋市文化財調査員 (1994) 「産泰神社文化財調査」『文化財調査報告書第24集』前橋市教育委員会

(44) — サトウの調査100周年を記念して、1980年度から2ケ年にまたがって古墳墳丘実測調査および出土品調

査等をおこなった。

加部二生 (1984) 「大黒塚古墳の測量調査」『アラトダヨリ』No.3 前橋市教育委員会

(45) — 加部二生 (1985) 「前橋地区の埴輪 - 5世紀～6世紀前半代の主要古墳出土品を中心として -」『埴輪の変遷 - 普遍性と地域性 -』北武蔵古代文化研究会ほか  
(46) — 註3文献に同じ。

(47) — 1951年, 1975年, 1988年に調査されている。  
尾崎喜左雄 (1951) 『(阿久山) 古墳発掘報告』群馬大学尾崎研究室

加部二生 (1988) 「阿久山古墳」『横穴式石室の受容』第10回3県シンポジウム資料集群馬県考古学研究所及び(註10)文献

(48) — 加部二生ほか『前方後円墳集成』東北・関東編 (1991) 山川出版社

(49) — 前原 豊 (1997) 「成果と問題点」『小二子古墳』前橋市教育委員会

同書では10例の集成が行われているが, 本稿で扱った阿久山古墳, 天神1号墳, 大稲荷2号墳, 大黒塚古墳等も同様の範疇で扱えると考えられる。

(50) — 厳密な意味では, 『前方後円墳集成』等の定義で分類すれば, 帆立貝形古墳もしくは造出付き円墳に該等するものである。

(51) — 大型前方後円墳の基壇面には若干の盛土による整形が認められる。このことは栃木県に多く認められる基壇面を広くとる前方後円墳にも共通している。この点については, 大橋泰夫氏に御教示いただいた。

(52) — 前二子古墳及び後二子古墳出土遺物の, 各文献ごとの数量推移については, かつて加部二生 (1990) において整理している。註24文献に同じ。

(53) — 前原 豊ほか (1993) 『前二子古墳』前橋市教育委員会では合葬の可能性も指摘しているが, 副葬品の配置や編年観からみても単独葬と考えるのが常識的である。同氏は, 鉤状金具の位置から, 帷幕で覆われる奥室部の範囲と, 石障の頭位幅を調整するための舗石面の目地とが一致していることから棺を指し違いに想定しているが, 鉤状金具の位置に石障は無い。本来は玉石敷きによりこの面は見えなかったはずである。これは玄室床面の捉え方から見解の相違がでるもので, 通常の横穴式石室の在り方を考えると, 石室床面は切石の舗石であってもさらに玉石を敷くのが一般的であり, 前二子古墳も, 羨道部分には玉石敷があることから, 本来は玄室部分にも板状舗石面上に玉石を敷いていたものと考えられる。そのことは(註23文献)をはじめとして, 開口当時の

目撃者が書いた文献では, 遺物と共に2石もの朱砂が出土し, それを以て「棺の内外を填実する。」と記載されていることから, 多量の朱泥じりの玉石をこのとき石室外へ出しているものと考えられる。

(54) — 註53文献及び加部二生・橋本博文 (1996) 「上野の前方後円墳」『東北・関東における前方後円墳の編年と画期』第1回東北・関東前方後円墳研究会

(55) — 註4文献に同じ。

(56) — 1991年の調査で出土した人骨を鑑定した宮崎重雄氏は, 石室内出土の土砂をすべてふるい分けを行っても, 歯が3本しか確認されなかったとして, 徳島県内谷古墳例等から服喪抜歯説を導き出している。しかし, これは調査者の説明不足により結論付けられたことは明らかで, 明治期に開口した際に, サトウも「数人分の人骨と歯」が出土したことを記しているように, 多量の人骨が出土しており, その際に取り上げを行っている。(註26文献)には「頭骨, 背骨, 歯数十あり」の記述があり, これらは, 他の遺物類と一緒に大室神社に納められたとされるが, 現在の所在は明らかでない。なお, 橋本裕子氏の御教示によれば, 近年の形質人類学からみた研究では内谷古墳の服喪抜歯説自体も疑問視されており, 本石室内に複数の被埋葬者がいたことは確実である。

(57) — 註10文献に同じ。

(58) — 註48文献に同じ。

(59) — 産泰神社の御教示による。

(60) — 註5文献に同じ。

(61) — 梅澤重昭 (1990) 「古墳時代の群馬」『群馬県史』通史編1群馬県史編さん委員会

(62) — 橋本博文 (1987) 「古墳時代における首長層の居宅と奥津城」『考古学雑誌』第72巻第4号 日本考古学会

(63) — 前原照子ほか (1982) 『富田遺跡群・西大室遺跡群』前橋市教育委員会

(64) — 前原 豊ほか (1992) 『後二子古墳・小二子古墳』前橋市教育委員会

(65) — 黒川真道 (1898) 「考古隨筆」『考古学会雑誌』第二編六号日本考古学会

(66) — 林 紀昭 (1973) 「大化薄葬令の再検討」『論集終末期古墳』塙書房

(67) — 加部二生 (1988) 「前橋市内出土の古式須恵器について」『元総社明神遺跡VI』前橋市埋蔵文化財発掘調査団

(68) — 加部二生 (1981) 「出土遺物よりみた考察」『金冠塚古墳発掘調査概報』前橋市教育委員会

(69) — 註53文献に同じ 但し、蓋形埴輪については群馬県地域の場合、藤岡市本郷埴輪窯跡では6世紀後半でも焼成されており、埴輪の消滅期まで継続することが志村哲氏により指摘されている。志村哲(1997)「新刊紹介-図説はにわの本」『群馬文化』第249号群馬県地域文化研究協議会

(70) — 個人所蔵品、筆者実見。

(71) — 前原 豊(1995)「成果と問題点」『中二子古墳』前橋市教育委員会 調査で出土した遺物類からはやはり6世紀の前葉を下ることはないと考えている。

(72) — 註24文献に同じ

(73) — 加部二生(1996)「素環鏡板付轡について-群馬県内出土品の分類と編年を中心として-」『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』群馬県古墳時代研究会

(74) — 赤城山南麓地域でFA層とFP層を見分けるのは困難である。特に、FP層の飛散量はかなり少なかったと推定される。科学的分析では供給源は明らかにできるものの、両者の相違は純層で層位的に存在しない限り区分はできない。このことは、本地域の1000以上に及ぶ遺跡調査例が証明しており、墳丘基盤にFP層が入ると断定している見解はきわめて懐疑的である。

(75) — 前原 豊ほか(1992)『後二子古墳・小二子古墳』前橋市教育委員会 では、方法論的に誤りがあったと指摘できる。一般的に特別な事情が無い限り、竪穴住居跡の一括遺物の年代を求める場合は、一番新しい土器(遺物)を持って年代を決定するのは当然である。古墳の場合は一番古い遺物で年代を決定しなければ、その後の、追葬、祭事行為等に惑わされる危険性がある。後二子古墳の場合、発掘調査で出土している在地産の長脚一段須恵器高坏の年代観からMT15~TK10段階に位置づけるのが妥当と考えられる。

(76) — 右島和夫(1995)「前・中・後二子古墳の特色」『第室古墳群の実像にせまる』前橋市教育委員会及び前原 豊(1995)「成果と問題点」『中二子古墳』前橋市教育委員会

(77) — 前原 豊(1997)「成果と問題点」『小二子古墳』前橋市教育委員会

(78) — 同じ墳形の前橋八幡山古墳は多量の葺石を持つことから、前方後円墳であるから無いという理由は成立しない。

(79) — 註24文献に同じ。

(80) — 註64文献に同じ。

(81) — 築瀬二子塚古墳については玄室幅の比較から合葬墓の指摘がある。坂本和俊(1979)「袖無型横穴式石

室の検討」『原始古代社会研究』5。しかし、これに対しては、右島和夫氏の批判がある。右島和夫(1983)「群馬県における初期横穴式石室」『古文化談叢』。同氏は前二子古墳も含めて、石室がかなり埋没しているので現状での測定値では当てにならないとしている。

(82) — 右島和夫(1997)「上野の横穴式石室と前方後円墳」『シンポジウム横穴式石室と前方後円墳』

東北・関東前方後円墳研究会及び松本浩一(1995)「群馬の横穴式石室の発展」『大室古墳群の実像にせまる』前橋市教育委員会におけるシンポジウムの発表内容。

(83) — 瀬和夫(1990)「近畿の横穴式石室地域論・大阪」『横穴式石室を考える』帝塚山考古学研究所。おそらく大王墓の系譜では、これよりもさらに巨大な石室を、この階段ですでに構築しているものと推定される。

(84) — この外、上半部を欠損するものの、後二子古墳天井石架幅(220cm)に近い値を想定されるものとして、MT15段階では磐田塚古墳(床面最大幅280cm)、井田川茶臼山古墳(床面最大幅240cm)等がある。さらに、後二子古墳と同時期のTK10段階まで範囲を広げて見ると、若狭丸山塚古墳(床面最大幅300cm)等、全国的な拡散状況が確認できる。なお、滋賀県野洲市あたりにも6世紀前半代で石室床面幅が広い古墳がまとも存在するが、詳細な実測図がないため検討できない。

(85) — 加部二生(1997)「群馬県内出土の蝦夷関連遺物」『遺物からみた律令国家と蝦夷』第6回東日本埋蔵文化財研究会

(86) — 註75文献に同じ。円筒埴輪列の補修をしている可能性が指摘されている。

(87) — 註54文献に同じ。

(88) — ここでいう墳丘すべての段とは、「3段階築成の場合は上、中、下段に葺石があるもの」と理解されたい。平坦面も含めてすべてにあるというのではない。

(89) — 天神二子古墳(墳長58m)、筑波山古墳(墳長55m)、舟山古墳(墳長66m)等。『前方後円墳集成』による。

(90) — ここでは仮に墳丘長100m前後の古墳を呼ぶ。

(91) — 石塚久則(1992)「葺石」『古墳時代の研究』7古墳I、大澤伸啓(1993)「葺石について」『栃木県考古学会誌』第15集

(92) — 終末期の典型的な方墳である前橋市宝塔山古墳は、墳丘を版築技法によって構築されているが葺石はもっている。寺院の基壇などの版築技法による場合でも、周囲は石で囲むように土だけでやはり脆弱である。また、

志村哲氏の御教示によれば、七輿山古墳の場合は周溝の底面部分にまで貼石が施されているらしく、湛水堀との関連を想定されている。

(93) — 相原俊弘 (1983) 「構造工学からみた古墳の墳丘」『季刊考古学』第3号雄山閣では観音山古墳のみ特筆しているかのような印象を与えているが、これは調査例が少なかったことに起因するもので、近年の古墳断ち割り調査から見れば、普遍的なものと考えている。

(94) — 甘粕 健 (1978) 「武蔵と毛野との関係」『稻荷山古墳』埼玉県教育委員会において埼玉県丸墓山古墳の墳形を96mの円墳として、畿内政権から前方後円墳を採用する承認を得られなかったという説をたてている。それに対しては墳形の確証がないことから橋本博文氏の批判がある。

(95) — 増田逸朗 (1987) 「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』新人物往来社では埼玉古墳群以外の周辺古墳において、6条突帯の円筒埴輪を使用できない規制が看取されるという。

(96) — ここで、各類型を各ランクと呼び変えられないのは、観音山古墳が最下位のランク付けになってしまうからである。副葬品の内容から、6世紀後半代では本地域トップクラスの観音山古墳が規制を受けるとするとその解釈は難しいものがあり、これらすべてを規制という概念で括ることに懐疑心を植え付ける。例えば、寿墓の場合は、被葬者の嗜好も反映される可能性があるし、造墓技術者集団の系譜も考える必要がある。群馬県内の古墳では、前期以来伝統的に葺石をもつのが一般的である。如何なる版築技法も葺石と組合わさってより強固になるのは常識的であり、石が入手困難な地域ならともかく、周囲に幾らでもある恵まれた立地条件に占地することに理解の範囲を越えている。中期以降の主要前方後円墳において葺石をもたない例は、近県では、埼玉古墳群に代表される埼玉県内の主要前方後円墳や、栃木県内を代表する笹塚古墳、摩利支天塚古墳等がいずれもE類である。また、観音山古墳と同じ井野川流域に占地する4世紀代の元島名將軍塚古墳が葺石をもっていない点は前に指摘したとおりである。ところで、埼玉古墳群内では円墳とされる丸墓山古墳には葺石が確認されていて、墳形の階

層差から見ると逆転した現象が認められている。埼玉県内でも、より群馬県側の前方後円墳である、とやま古墳や、本庄児玉地域では葺石は確認されており、栃木県内の足利地域も同様であることから、伝統的に葺石をもつことが群馬地域の特徴と考えられ、その範囲は土生田 (1996) によって指摘されている横穴式石室内から土器を出土する古墳の地域とオーバーラップするはずである。とすると、丸墓山古墳は群馬との関わりの中で築造され、観音山古墳の解釈も埼玉や栃木等との関わりが考えられないだろうか。

土生田純之 (1996) 「葬送墓制の伝来をめぐって—北関東における事例を中心に—」『古代文化』第48巻第1号

(97) — 時期区分も「前方後円墳集成」による。なお二重周溝の可能性は高い。

(98) — 橋本博文 (1979) 「上野東部における首長墓の変遷」『考古学研究』第102号

〈追記〉本稿は1989年10月15日に前橋市生涯学習推進本部・西大室町自治会の依頼により西大室町公民館で行った『西大室町歴史講座』の講演要旨を基本にして加筆訂正したものである。特に、その後1991年に群馬県立文書館の根岸孝一家文書展が開かれ、地元に残る公文書の存在の詳細が明らかになった。また、1992年にはすでに萩原訳本で一部明らかであったサトウ日記の該当部分が東洋文庫で出版され、サトウの調査行程がかなり詳細に辿れるようになり、併せて前橋市教育委員会による大室3二子古墳の整備に伴う発掘調査が開始されるに至り、新事実が明らかになったことから、解説部分を補充した。近年、境町教育委員会の坂久純氏より、かねてからご教示をお願いしていた保泉の鈴木家についての詳細が明らかになったとの連絡を戴いたのを契機に今回再構成したものである。なお、本稿を草するにあたって、杉山晋作先生をはじめとして坂久純氏、田中尚氏、田島亘氏、中東耕志氏、根岸孝一氏、橋本博文氏、橋本裕子氏、志村哲氏、前原豊氏、山崎武氏、群馬県立文書館、群馬大学図書館、産泰神社、群馬県古墳時代研究会の皆さんにお世話になった。記して謝意を表する。

---

## **Contributions of Ernest Satow's "Ancient Sepulchral Mounds in Kaudzuke" to the Development of Archeology in Japan**

KABE, Nitaka

The English diplomat Ernest Satow (Sir Ernest Mason Satow) stayed in Japan over a long time span during the end of the Tokugawa Period and the beginning of the Meiji Period, authoring many books and scholarly articles on Japanese Studies. Satow was especially interested in archeology, and visited the Omuro Tombs in Maebashi City, Gunma Prefecture, from the third to tenth of March, 1880. The results of this research were presented at the annual meeting of the Asiatic Society of Japan the following year, then published in English as *Ancient Sepulchral Mounds in Kaudzuke* (Transaction of the Asiatic Society of Japan; Vol 8 Part 3). This document has been referred to and cited by many subsequent scholars, but had not been fully translated into Japanese until now.

The Omuro Tombs which Satow visited had just been opened two years previous, with a wealth of artifacts being discovered. Thanks to quick action on the part of the local authorities, haphazard removal of the artifacts had been avoided, and careful and accurate records could be made in situ. Satow talked directly with the people in charge of the excavation, visited the site, and brought along an artist to make detailed sketches of the artifacts. He also carried back some samples of glass beads and for scientific analysis. Utilizing historical documents such as the *Nihonshoki* and lists of noble families, Satow attempted to estimate the date of construction and determine the occupants of the tombs. Satow's methodology came as a surprise to Japanese researchers, and exerted as strong influence. Satow also surmised that the residences of the people entombed should be nearby. Although the location he suggested turned out to be mistaken, remains of nobility residences have recently been discovered at the nearby Umeki Site, thus verifying Satow's intuitions. Satow's work showed Japanese archeologists that interpretation of ancient burial mounds must be based not only on historical documents, but on careful analysis of the archeological evidence as well.

In recent years the Omuro Tombs have been researched in preparation for preserving the site. A relationship has been identified between size and shape of the individual tombs. Only the larger tombs, designed for the most prestigious people were built in the keyhole style.